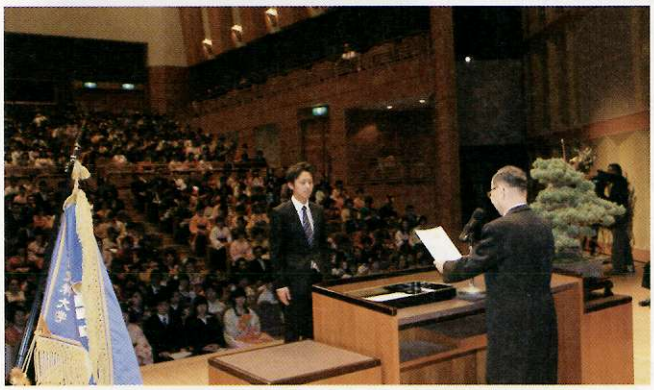
都留文科大學報

第113号
2010年
7月21日(水)

編集　都留文科大学広報委員会

〒402-8555　山梨県都留市田原 3-8-1　都留文科大学内
☎ 0554-43-4341　URL：http://tsuru.ac.jp/


平成 21 年度都留文科大学卒業式

陸上日本代表決定の市長報告

第 41 回つる子どもまつり

名誉教授称号授与

都留文科大学入学式 …… 2
今谷前学長より新入生を迎える言葉
初等教育学科　入倉修理
国文学科　金井美緒

第 12 代学長に加藤祐三氏が就任 …… 4

法人化特集
　高田理孝、福田誠治両副学長に聞く …… 6
高田理孝副学長／福田誠治副学長　司会：菊池信輝

新教員紹介　文大に着任するにあたって …… 10
附属図書館　日向良和講師
国文学科　新見公康特任教授
地域交流研究センター　品田笑子特任教授
地域交流研究センター　北垣憲仁特任准教授
保健センター　渡辺新特任教授

学外研究報告 …… 15
初等教育学科　寺川宏之教授
国文学科　牛山恵教授／国文学科　寺門日出男教授
英文学科　中地幸教授／社会学科　野畑眞理子教授

講演会だより …… 20
初等教育学科講演会の報告
英文学科・英文学会共催講演会の報告
社会学科・地域社会学会共催 2010 年度前期講演会
国文学科創設 50 周年記念講演会〔案内〕
平成 22 年度　第 1 回情報センター所属学生指導員講座

「第 6 章　ムリネモの森へようこそ」 …… 24
地域交流研究センター長　杉本光司教授

昨年度の就職状況を振り返る …… 26
就職委員会委員長　千葉立也教授

「学生による授業アンケート」の結果から …… 28
ＦＤ委員会委員長　樋渡登教授

文大だより …… 32
図書館ガイダンス／笠原氏に名誉教授の称号を授与
第 37 回鶴鷹祭／第 89 回関東インカレ男女共にリレー入賞
第 41 回つる子どもまつり開催
タイ王国公使参事官が本学を訪問
本学卒業生と学生、日本代表陸上選手として 2 大会出場
人事異動
本　ぶんだい堂／編集後記…鳥原正敏 …… 36

都留文科大学入学式

今年の入学者は 836 名

４月５日（日）都の杜うぐいすホールにおいて午前と午後の２部制での入学式が行われました。

午前の部では、初等教育学科 192 名、社会学科現代社会専攻 102 名、同学科環境・コミュニティ創造専攻 65 名、文学専攻科９名、大学院文学研究科 22 名、学部３年次編入 32 名の２学科、専攻科、大学院等 422 名の入学が許可され、午後の部では、国文学科 144 名、英文学科 144 名、比較文化学科 126 名の３学科 414 名の入学が許可されました。

会場の大ホールは、入学者とその保護者でほぼ満席となり、最後列には立ち見の保護者があふれる中で、冒頭の挨拶を公立大学法人都留文科大学西室陽一理事長が行い、続いて体調不良により欠席した今谷明学長に代わり高田理孝副学長が代読による新入生を迎える言葉、設立団体の都留市からは小林義光市長の祝辞が述べられました。入学生代表として午前の部では入倉修理さん（初等教育学科１年生）が、午後の部では金井美緒さん（国文学科１年生）が、それぞれ入学の言葉を読み上げました。式の最後には本学管弦楽団吉田悟氏の指揮による「花のかげ」を全員で合唱し、厳粛なうちに式が終了しました。

新入生のことば

初等教育学科　入倉修理

麗らかな春の陽射しに誘われて、桜もほころび始めたこの佳き日に、伝統ある都留文科大学の入学式を迎えられたことを、大変光栄に思います。今日からの四年間という限られた時間の中で、仲間と共に学び、日々切磋琢磨しながら、充実した大学生活を送りたいと思います。

現代の社会は、情報化やグローバル化の急速な進展によって、さまざまな情報や製品を簡単に手に入れることができるようになりました。しかしその一方で、人と人との関わりや地域社会の結びつきが薄れてきてもいます。また、世界的な経済危機はなかなか出口が見出だせず、百年に一度と言われる不況の中で、格差の拡大やデフレスパイラルなど、さまざまな問題が山積しています。さらに、学生の就職状況も非常に厳しいと言われています。このように見てくると、私たちの前に横たわる厳しい現実から目を逸らすことはできません。

しかし、現実の厳しさに不安を感じたとしても、私たちにはしなやかな若さと、大きな夢や希望があります。その夢を諦めずに立ち向かってゆく強さを培っていきたいと思います。私たちは今、将来の人生を自らの手によって切り拓くことのできる環境にいます。その幸せを忘れてはなりません。

だからこそ、大学生活の中で、しっかりとした目的を持って学びを探究し、自ら考え行動できる力を身につけ、社会人として通用する教養と能力を育むべきだと思います。

また、勉学だけでなく、部活動やサークル活動などを通して、たくさんの人たちと交流を深め、互いに高め合う存在になりたいと思います。そして、協力すること、信頼し合うことの大切さを学ぶとともに、地域の方々ともさまざまなところで関わり合いながら、人間性を豊かにし、心身ともに成長していきたいと考えています。

私たちは、都留文科大学の学生として、恥じることのないよう、また、社会に貢献できるよう、自覚と誇りを持って、歩みを進めて参ります。そして、未来を見据えた目標と、大きな志を抱いて、大学生としての一歩を踏み出すことを誓います。

◇◇◇

祝　辞

前都留文科大学長　今　谷　　明
高田理孝副学長代読

前学長　今谷　明氏

厳しい入学試験を勝ち抜いて、見事合格を果たした新入生諸君、入学おめでとうございます。ご家族の皆様もさぞかしお喜びのことと心からお祝いを申し上げます。また本日は、都留市長をはじめ、ご来賓の方々には、お忙しい中わざわざのご臨席を賜りまして誠にありがとうございます。厚く御礼を申し上げます。多くの方々の列席のもとに、本学の若い構成員を迎えることが出来ることを、心から嬉しく思います。

本学は昭和28年（1953年）に県立の臨時教員養成所を前身にスタートし、すでに60年近くにもなる公立大学であります。各府県に置かれていた臨時教員養成所は、所期の目的を達して次々と廃止されましたが、山梨県都留郡に置かれたこの養成所のみは、有志の努力で廃止されることなく、昭和30年（1955年）短期大学として存続し、次いで昭和35年（1960年）都留市立の4年制大学として生き残ることになりました。山梨県の県都でもない都留郡の谷村という小さな町に公立大学が誕生したことについては、この地が甲斐絹の名産地として比較的豊かで、住民に進取の気風があったことが考えられます。初代の学長は『大漢和辞典』の編纂で著名な諸橋轍次先生です。

発足時の構成は文学部1学部で初等教育学科と国文学科の2学科、入学定員はわずか50人というささやかな規模でしたが、50年後の現在、学生数は3千人を超えており、初等教育学科・国文学科・英文学科・社会学科・比較文化学科の5学科を擁し、その発展を顧みますと、誠に感慨無量のものがあります。しかし、何しろ人口わずか3万人の小都市が大学を経営するのですから、財政的には困難を余儀なくされ、当初は市内にある東京電力の谷村発電所の固定資産税を大学の経費に充て、何とかやりくりしていたと聞いています。多少とも大学の財政が安定化してきたのは、昭和43年度（1968年）から、自治省の地方交付税が大学分として交付されるようになって以降であります。

しかし、当時においても、市の一般会計の2割近くが大学への繰出しであり「大学運営が市財政を圧迫している」との発言が、しばしば市側から発せられていました。このような状況下で、いわゆる学園紛争も厳しさを迎え、都留市は大学を持て余し気味となり、昭和44年（1969年）には教授会において大学の県立移管の促進を決議しており、さらに47年（1972年）には、市議会が大学の国立移管を要望する決議を行っております。また紛争が一段落しますと、全国の自治体に大学経営ブームが起り、わずか人口3万人の小都市が大学を直営しているとあって、地方公共団体の視察が本学に集中したこともあります。要するに、この大学が不思議がられ、羨ましがられた時代もあるということです。

本学の建学の精神は「青莪育才」であると諸橋初代学長によって定められています。中国の古典『詩経』から採られた成句でヨモギが青々と茂るように、若い才能を育成することを楽しむ、という意味です。それに関連して、私から新入生の皆様に申し上げたいことがあります。大学入学後、漫然と大学生活を送ってしまうと、4年間はアッという間に過ぎてしまいます。皆さんには、4年間で将来の生活設計を立てるのだ、という気構えで、充実した日々を過ごして頂きたいと思います。本学は、その前身・母体である臨時教員養成所以来、教育養成というのが大きな柱となっています。また公務員養成も伝統があり、この2つの柱に関しては本学では大きな自信を持っております。

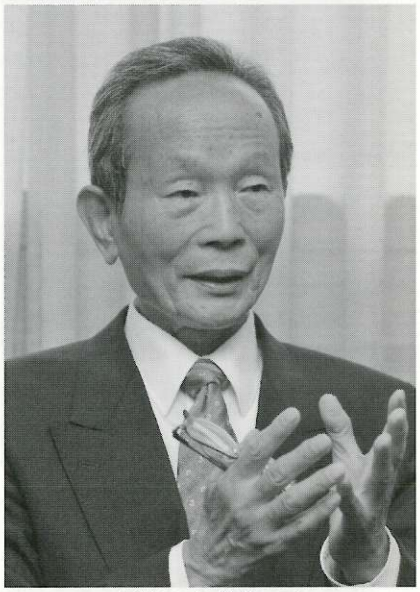
民間への就職については、時代的背景もあり厳しいものがあります。支援体制の拡充も不可欠です。と同時に個々人の意識がさらに重要です。新入生の皆さんに、申し上げるのは気がひけますが、社会に出れば、何としても働いて自立するのだ、という意識をはっきり自覚して頂きたい。時代は若い力に期待しています。若い人々が担い手にならなければこの国は衰退するしかありません。

希望に胸をふくらませている方々に、学長として不粋なことを申し上げたかも知れませんが、今後の4年間は、皆さんの人生にとって貴重な時間となることでしょう。読書や学問にしても、スポーツや芸術活動にしても、精一杯の力を注いで頂きたいと願っています。

この都留文科大学は、皆さんの未知の世界・未踏の分野への努力を、後方から支援することを約束致します。厳しい時代であるからこそ、皆さんの若い力を以て当面する、この困難な状況を切り開くことが重要だと存じます。それぞれの関心を大切にして、積極的に勉学や趣味を楽しみ、また友人をつくる等、頑張っていただきたい。本日は、入学おめでとうございます。

学長就任にあたって

都留文科大学長　加　藤　祐　三



新学長　加藤祐三 氏

2010年７月１日、本学学長に就任しました。心が引き締まる思いで、覚悟を新たにしています。

横浜市立大学長を2002年４月に退任した私は、公立大学協会相談役として公立大学の発展のために微力を注いできました。本学の学長を拝命するとは夢にも思わず、まだ学内事情に通じていません。見当違いの面もあろうと思いますが、いま考えていることの一端を述べたいと思います。

大学とは

４年前の平成18（2006）年12月、じつに60年ぶりに改正された教育基本法の第７条で、大学に関する定めが初めて明記されました。

> 大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。
>
> 大学については、自主性、自律性その他の大学における教育及び研究の特性が尊重されなければならない。

前者（第１項）が大学の果たす教育・研究・社会（地域）貢献の３つの「役割」を意味します。私はこれを図示し、「知の三角形」と名づけています。そのうちの教育面では、「高い教養」と「専門的能力」が併記され、両者の比重は各大学が自主的に定めます。

後者（第２項）は憲法の「学問の自由」「大学の自治」に基づく大学の自主・自律性の尊重、とくに「教育及び研究の特性」の尊重を意味します。

「大学における教育及び研究の特性」を尊重するのは誰でしょうか。「主語」は国家や設置自治体はもとより、大学を構成する教職員・学生、学生の保護者、地域住民、国民です。とりわけ教育研究の直接の担い手である教員こそ、「大学の特性」を自覚的に尊重しなければなりません。

近未来の大学設計

大学進学率の向上、少子高齢化、低成長・成熟期の到来、グローバル化等々、時代は急速に動いています。大学教員は、この時代の変化をいち早く理解する先頭に立つべきでしょう。

法人化した現在、６年間の中期目的・目標・計画を実行するとともに、次期の中期目標・計画を立案する必要があります。先行き不透明な問題を解き明かすには、学内の談論風発が不可欠です。そこには異分野間の刺激的な学術交流も、また多彩な個性の発見もあるはずです。本学教職員の豊かな思考と経験を存分に発揮していただきたい。

全国から多様な地域特性を持って本学に集まった学生は、本学で新たな文化を創造し、やがて社会人として巣立っていきます。受験勉強を終え、大学でも「受信」が必要ではありますが、学生諸君が自らの課題を発見し、それを「発信」していけるよう教育することが重要です。

文科大学と文学部

大学名には大学の個性・特性が込められています。都留文科大学は、大学名に「文科」が入る公立大学で唯一の大学であり、文学部１つの単科大学も本学だけです（文学部を持つ公立大学は全部で７校）。

第12代学長に加藤祐三氏が就任

文科大学といえば、まず想起されるのが、明治19（1886）年の帝国大学令により開設された6種の「分科大学」の1つ、文科大学です。明治期に模範とした西洋の学制のうち、ドイツ（プロシア）の影響が強く、科学を文化科学（文科）と自然科学（理科）に2分、この2種が大学を構成し、法科、医科、工科、農科の4種は専門職養成機関として区別されました。

ところが明治日本の帝国大学は官僚養成が目的であり、「専門的能力」の養成に大学の大きな役割を求めたため、法・医・工を先に、「基礎」的な「高い教養」の基盤である文と理を後ろに並べました。

文科大学は、主に哲・史・文（哲学・史学・文学）で構成されます。普遍妥当な価値とされる「真善美」にそれぞれ対応する学問領域で、すべての学問の基盤となる分野です。

2010年5月25日に東京で開催された公立大学協会第73回総会後の意見交換会で挨拶する筆者

後に生まれる旧制高校は文科と理科の構成で、もっぱら「高い教養」を教えました。一方、英語でいうliberal artsはアメリカでは一般教養教育を、中世欧州では学芸、文芸、人文科学を意味しました。文科はこれにも近いと言えましょう。

大正8（1919）年、帝国大学が総合大学になると、文科大学は帝国大学文学部となり、ここで文科が文学部とほぼ同義になりました。また哲・史・文に加えて、心理学、社会学、教育学等を徐々に包摂し、戦後にはアメリカ流の文化人類学等を広く含んで人文科学と総称され、社会科学（法学・経済・経営等）と区別されます。

進学率の上昇に伴い、応用的要素の強い「専門的能力」、つまり文系では社会科学が、理系では工学・農学等が増えました。文学部は軽視されがちですが、理系の理学（物理・化学・生物・数学）と並び、機軸の学問領域であると私は考えます。

本学の特長を伸ばす

本学では長い伝統のなかで卒業論文を必修とする制度が定着しています。卒論作成は、学生が身につける「高い教養」と「専門的能力」の証明書のようなものです。これは本学の誇るべき大きな教育財産です。

その一方で、社会人としての大部分の作業過程は「話し言葉」を通じて行われます。コミュニケーション能力は主に「話し言葉」による発信行動です。

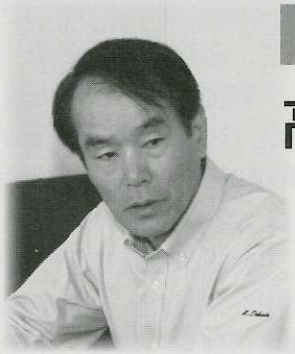
この技術訓練を入学直後の早期から実施できないものかと考えます。多様な方言を持つ学生諸君が方言の価値を再認識するとともに、共通語との「バイリンガル性」を発揮するなかで、「話し言葉」による「伝える力」を強化させたい。30秒スピーチ、3分スピーチ等、さまざまな手法があるはずです。こうして「社会性」を獲得させ、就職活動にも役立たせたい。教職員の知恵と工夫をいただきたい。

なお学生の英語力向上は確かな母国語の上に築かれるのが理想ですが、短い学習時間のなかでどう折り合いをつけるか、これも今後の課題だと考えています。

加藤祐三氏プロフィール

1936（昭和11）年12月	東京都生まれ（73歳）
1960（昭和35）年 3 月	東京大学文学部東洋史学科卒業
1966（昭和41）年 3 月	同大学院人文科学研究科東洋史学専攻（博士課程）中退
1966（昭和41）年 4 月	東京大学東洋文化研究所助手
1973（昭和48）年 4 月	横浜市立大学文理学部助教授、のち教授
1989（平成元）年 4 月	同大教養部長
1995（平成 7 ）年 4 月	同大国際文化学部長兼大学院国際文化研究科長
1998（平成10）年 5 月	横浜市立大学学長就任
2000（平成12）年 5 月	公立大学協会副会長就任
2002（平成14）年 4 月	横浜市立大学学長退任、同大退官
2003（平成15）年 5 月	公立大学協会相談役就任（本年6月末まで）

趣味は硬式テニス



法人化特集

高田理孝、福田誠治両副学長に聞く

公立大学法人となって１年

都留文科大学が公立大学法人となって１年が経過しました。この１年間で本学はどのように変化し、また今後どのように変わっていこうとしているのでしょうか。都留文科大学広報委員会は、この間中心となって大学運営を行ってきた高田理孝、福田誠治両副学長に率直にこの質問をぶつけてみました。

インタビュアー（菊池信輝：広報委員長）

■走りながら作ってきた１年

――まずこの１年間、どのようなことに取り組まれ、どのような成果を成し遂げられたとお考えでしょうか。

高田（以下Ｔ）：まず研究費に関しては創造支援費ということで従来にない額を設定しました。

福田（以下Ｈ）：1,600万円ぐらいの額になっていますよね。

Ｔ：創出したんですよね。法人化をしたことによって、新しい芽を出す必要があるだろうと。ただ残念ながら１年目ということなので、せっかくつくったものがまだ十分に生かされていないという印象を持っています。次に学内行政の整理ということで、これは本来の法人化のひとつの目的というのが意思決定を時間をかけずにやっていくということでした。当初、教育研究の事項に関しては教育研究審議会で、経営の部分では経営審議会でという、考え方でスタートしたけれども、その意図が我々も含めて構成員全体に理解されていないところがあったのではないか。逆に言うと１年間だけ見ると業務が極めて過重になっているところも当然あり、法人化以前の段階に比べると、ある種の仕事が特定の人たちに集中してくるという形で、かなり負担になってきているというのが事実だと思うんですね。

Ｈ：１年間の成果を一言でまとめれば、大きな混乱なくソフトランディングを果たしたということですか。劇的に変えたいという人もいるんですけれども、学内理事である我々としては前からの約束で「大きな変化を引き起こすことなく」という形での引き継ぎを考えて、その点では上手くやってきたと思うんです。良いところは残しながら新しいことをやろうと。出版助成制度は前に決まっていたんですが、実際に動いたのは独法化になってから。また大哺乳類展協賛ができたこと。あと表彰制度をつくったり。そういう点では新しい制度で今までないようなことができたと思います。それから授業料免除枠も５割増しにしました。だから、予算とか自分たちで使えるようになって、見通しさえ持てばいろんなことができ、今までのようなやり方とは違う。その中の研究費の全体枠が増えた。さらに特任制度をつくった。未知数だけれども、とにかく新しい制度をつくったという点では、１年間は忙しい中でもやってきたかなと思います。とにかく大変だったんですよ。前年とのいろんな絡みもあって、４月１日に突然独法化になったわけですから。普通の大学は２，３年かけて準備をしているらしいんですよね。

一同：（笑）

Ｈ：その準備も何もなく、突然膨大な資料を読み解きながら、規則を整理しなきゃいけなかった。規程類ですよね。その点でとても忙しかったということですけれども。逆に言うと良かった点は…

菊池（以下Ｋ）：それは何でしょう。

Ｈ：不文律。要するにみんながわかったようなつもりになっていて、自分たちが動かし、教員が動かしていたと思っているけれども、ルールになっ

法人化特集　高田、福田副学長に聞く

ていたのかどうか、どこに文書化されているんだという、そういうのもあったんですよ。それも含めて法人化後に明文化しているわけです。とにかくつくりながら走る、走りながらつくるというか、それをやってきた1年だった。教授会から大きく分けたのは人事のところですか。それ以外はほとんど同じにしてあるはずです。

■これまでの都留文に対する評価と独法化

――本学は教員と学生の距離が近いこと、教員が全員参加で学校づくりに関わっているという特徴があると思います。その点に関する評価と、そして独法化によってどう変わってきているかについてお聞かせください。

T：教育研究だけ取り出せば、法人化をあの時点でする必然性というのがなかったなと思っている。だけどひとつ言えるのは、これは心理学では機能的固着というのですが、常に成功パターンというのが続くと、新たな路線であるとか柔軟な対応というのを見失ってしまい、常に同じことの繰り返しで、最終的には失敗に至る、それと同じようなことが将来起こり得るかもしれない。

H：上手くいっているときには今までのやり方を踏襲し、全員参画型のようにみんなで意欲的に取り組めばいいんですが、大学全体が社会的に見てバランスよく教員配置がされているかチェックする機構がおろそかになっていたのかな。現状維持で、なかなか根本的に変えるような政策は打ち出せなかったということがあるのかもしれませんね。

T：都留文の良い面はアットホームで教員と学生の距離が非常に小さいという部分。それに、教職員が積極的にこの大学を外に売り出していく努力をしてきたという部分だと思います。大学というのは、当然入り口・出口を確保すると同時に、その内部で付加価値をつける作業をしなきゃいけない。それに向け様々な改革を推し進める必要があります。それを教授会で十分に議論をして、実行に移すとなると最低2，3年かかってしまう場合があります。これまではそれで良かったが、現在では、もっとそのスピードがアップしていないと、アイデアがあってもいざやろうとしたときに、他のところでやられてしまう可能性も当然ある。十分な検討とスピーディな実行、その結果については、検証作業をし、駄目だったらまた別の方法を考える。そういうスクラップ・アンド・ビルド的な考え方も持ちながら、やっていく必要があるなと思いますね。

■都留らしい独法化とは

――改めて今後の「公立大学法人都留文科大学」の理念というものを語るとするとどうなるでしょうか。

H：今までの都留の良さを残しながら、他の大学にないようなものを作っていく。多分、何年か後に時代の最先端にこういう大学が踊り出るのではないかと。

一同：(笑)

H：ある種の「管理のない管理」というか、みんなが自覚して働いていけばいいということでしょう。だから次に全員参画型との絡みになるとも言えるけれども、多分もうちょっと表現を変えなきゃいけないんだろうなと思います。

K：せっかく中小企業みたいな感じでやっていて、教員側の口上もトップダウンになると今までのような下々のやる気が失われてアイデアを出してこないという話になりますよね。そこをどう上手くやるかというところが一番今大きな問題なんじゃないかと思うんですけれども。

H：本学では先生方がかなりマルチに活動しているといいますが、授業をやっているだけではなく大学の様々な運営にも絡んでいるし、それからアイデアを出してそれをより活発化しようとも考えているし。授業評価だけで教員を見ていこうというようなら滑稽ですよね。

K：規程面の不備といいますか、緩い構造の部分を攻めるのは、せっかくの良い面をなくしてしまうと。

T：そこは逆に言うと、都留の昔からの伝統なわけで、良さです。そういうものを残しつつ法人化して、この次の時代を乗り切ろうというふうに。自らハンドルの遊びを潰してしまうと身動きがとりにくくなる。

H：規則通りに動かそうというわけではありません。趣旨で

法人化特集　高田、福田副学長に聞く

いうと、この規程を使っちゃまずいよとか、そういうのもあるんです。書いてあるからいいじゃないかという論理を立てると、永遠にその規程をいじくるということになっちゃうしね。

Ｔ：そもそも規程そのものを簡単に変えることができないので。やっぱり運用面で何とか。

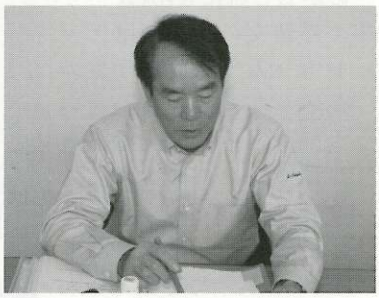
Ｈ：法人化の規程類はつくってはみたものの完璧なものではない。すぐは変えられないが、どこかの段階ではまた整理をしなきゃいけない。

Ｔ：見直しをするというのは当然必要ですよ。

Ｈ：他にうちの良さと言えば、手づくりの教育で人間形成を重視してきたと思います。育成といいますか。法人化された大学では、知識や技能を教え込むという教育が重視され、そういうやり方でどんどん教育管理が数値化されつつあるじゃないですか。学生は自分探しをしながら自分の生き方を決め、教員はそれをお手伝いをする大学。もうひとつは学問への根源的な問いでしょうか。そういう根本的なことをじっくり時間かけて考えるということです。先生方が自分の研究をして、その研究領域で自信のある最先端のことを学生に伝えながら、育てていくということですかね。

Ｋ：しかし、自分探しをしているまま卒業してしまった学生も。

Ｈ：まあ結構いますが。でも、大学に来ないでそのまま働いていたらなかなかそういう機会もなかったかもしれない。逆にあったかもしれないけれどもいろんな人と交流しながら、かなり密な人間関係の中で「生きる意味」や「学ぶ意味」を問うているという、そういうのでもいいのではないかと



思いますけどね。

Ｔ：それは単なる授業とか、学内だけの人間関係にとどまらず、外へ出て一緒に合宿をしたりする。逆にそういうものを通して教員自身が成長しているという部分があるわけです。それで同窓会、あるいは高校訪問しても、99％が「いい大学ですね」と、都留に対する評価が高いんですよ。それは単にきちんと勉強を教えているだけではなくて、そこから卒業してくる学生たちがそれなりの人間性というのを身につけて、職場でしっかりやっているという、そういう評価の高さというのが都留のひとつの売りではあるかな。

Ｈ：うん。それが教員になったり就職してから多分長続きするんでしょうね。自分の頭を働かせていれば修正もできるし、なかなか得体をつかみにくい話ですけれどもそこにこだわらないと、多分成績の数値化として単位数とかによる管理強化という議論に巻き込まれちゃう。

Ｔ：オフィスアワー云々というのが法人化でも出てきているけれども、実際には多くの教員がオフィスアワーという限定した時間を設けないけれども、きちんとそれを上回るいろんな指導をしている。だからこそこの大学というのはまあまあ評判がいいんじゃないかなと思いますね。

■「全員参画」の意味を再検討する

――教授会自治を骨格とした「全員参画」型の大学運営は今後どうなっていくのでしょう。

Ｈ：全員参画型の旗はおろしたくないんですよね。それぞれの人が自分の持ち味を生かして、自分の出来るところをする。そしてれを組み合わせて全体が上手くいっている。一律に何かしろというふうに全員参画を考えてもらっても困る。

ただ、今ここにきて思えば、我々が考えていた全員参画に弱点があったと。一つは、教員だけの全員参画であったことだ。全員参画といったときに、少なくとも教員と事務方とは一緒に大学をつくっているんだというところには、もう法人化になったらそこに踏み出さなきゃいけないわけで、「教授会の自治」の論議にとどまっていてはだめですよね。先生だけが決めている仕組みが世間に通用しないから独法化になったわけで、ある面では先生方が全員参画という論理でしか戦えなかったところが弱点で、設置者側というか、市側も一緒に大学をつくるというような論理を組み立てていれば本学の独法化はもう少し違っていた。大学の自治といったときには構成員全員になるわけですよね。それに対して市が直接介入しない。つまり理事会も含めて大学をつくって、市が直接介入してくることはないという形の大学の自治をつくれているので、世間的にいえば前進しているはずです。それを前進ととらえられないのはちょっとこちらの理論が弱かったかなと。いろんな人も発言でき

法人化特集　高田、福田副学長に聞く

るように、あるいは事務の人たちも大学をつくっていくというので、いろいろアイデアを出し活動するとか、専門領域で活動してもらうわけですから。そういう理論をつくらなきゃいけない。

第二の弱点は、全員参画が、同調の強制、「正論」を押しつける論理になっていた。大学はいろんな人がいて大学で、多様な考えの人が交流し合う場だ。異質の考えを持つ人を脅したり、考えの近い人ばかり集めていては、小型化しつまらない大学になってしまう。

K：意識の改革が必要だということですね。

H：少なくとも教員と事務とは協力するという形に法人化のシステムはなっている。

T：全員参画型という、言葉の意味というのは当然昔も今も重要だけれども、少しずつ意味が変わってきているんじゃないかな。

■本年度の方針

――さしあたり本年度はどのような分野に力を入れられるのでしょうか。

H：創造支援費を使い、これからさまざまなプロジェクト等を立ち上げていけば大学全体として成果を出すことができるんじゃないか。恐らくこれから大学が特色を出していくということを考えていった場合に、従来の縦割りの学科別の教育ではなくて、学科横断型のプロジェクト、研究費を使うことによってできていったらいいのではないかと考えております。

T：当然のことながら、規程等は簡単に変えることはできません。しかしながらその規程の中で運用の部分でまだやりようがあるというふうに我々は考えています。そういう意味で、今一番最優先に取り組んでいるのは、教育研究審議会で、どのような機能を受け持っていくかということです。改革案は出来れば1年間かけて、喫緊の話題に関しては夏休み以前に一定の方針を出していきたいと考えています。

H：教研審の議事録については公表しないという統一見解が出ています。それは、審議の後で「誰がそう言ったのだ」という個人攻撃、追及が始まると本筋から外れてしまう。

K：今お話にありました創造支援費は、お話の通り私も含めて上手く趣旨が理解できていないと思うんですけれども、これを実現していくためには一体どうしていけばいいでしょう。具体的には動員をかけるわけですか。

H：いや、例えばジェンダープログラムはもうそろそろ成果をまとめたらどうかと去年も言っていたんですね。何年か経って、どんな事業が行われていて、それで学生にどんな影響を与えたかとか、卒業生は就職した後どんな関わりがあるのかとか、そういう調査をしてもいいと思うんですね。そういう調査費をつけてもいいんじゃないかなと。他に環境問題では坂田さんのＧＰを大学で取り組んでもいいだろうと。それから、教員養成制度改革は今年から取り組まざるを得ないでしょうね。先生たちでプロジェクトをつくって、ひとつのテーマで複数の先生が。科研費の学内版ですね。うちの大学にふさわしいようなテーマをつくりながら、大型の研究費をつけていくということは出来るだろうと。

T：中期計画で卒業生に対する調査というものをひとつの項目として入れています。ある意味では網羅的に薄い調査と、それから非常に特色あるＯＢを取り上げて、その人の特徴をまとめてみるとか。本学の違った側面や我々もよく知らなかったようなことが出てくる可能性があり、尚且つそういう人たちとのコネクションができれば、また就職に何らかの形で役に立っていくという。かなり実利的な部分でも、そういうプロジェクトも研究費でやっていったらどうなのかなというふうに思いますね。

K：どうでしょうね。手が挙がるかどうか。

T：ぜひ広報委員長に協力してもらって。

一同：(笑)

H：そう。広報委員長に協力してもらって。あるいはホームページをつくるとか、業者に丸投げじゃなくて、自分たちの学科がアピールできるようなホームページとかなんかでもいいんじゃないかなと思いますがね。アドミッションポリシーと絡めて。

T：その3ポリシーを当然ホームページに載っけていくということになるので。

K：どうも長い時間ありがとうございました。

収録日：2010年5月11日

新教員紹介

文大に着任するにあたって

都留文科大学の教員として

図書館専任講師
日向良和

平成22年度図書館学（司書資格）新任教員として採用いただきました日向良和（ひなた　よしかず）と申します。これまで附属図書館司書として働いてきましたが、この度教員として改めて都留文科大学に勤務することとなりました。

私は平成８年に都留市役所に就職していらい、14年間ずっと附属図書館に勤めてきました。就職した当時は現在の４号館に図書館があり、当時はインターネットがようやく一般家庭に普及してきたばかりでした。

附属図書館に勤務してからは図書館ホームページの立ち上げ、図書館システムの更新（汎用計算機システム→サーバ・クライアント型）、紀要電子化など、通常の司書業務と並行して主にデジタルデータを扱ってきました。

この学報がでたちょっと前、５月28日にアップル社のiPadが発売されました。iPadは電子書籍リーダとして非常に期待されており、発売時には店頭に行列ができるようでした。日向も早速研究用として導入し、図書館などで展示しながら、皆さんに新しい図書館サービスとしてのご意見を伺いたいと存じます。

14年間の司書としての勤務では、新図書館建設が印象に残っています。司書として働く中で新図書館建設に立ち会えるのは一生に一度のことです。フロアの配置や書架、家具の設計、資料配置計画や資料の引っ越しなど、貴重な経験をさせていただきました。

さて、これから司書資格、司書教諭資格を取られる方に、私の経験から学んだアドバイスをしたいと思います。それは、資格取得は入り口であり、常に最新の情報を幅広く収集しながら司書として成長してほしいということです。私も勤務してすぐにアメリカ、サンフランシスコの公共図書館、カリフォルニア大学バークレー校図書館、ラスベガス大図書館と海外の図書館を見学する機会に恵まれました。また社会人大学院である慶応義塾大学大学院の図書館・情報学専攻情報資源管理分野への進学・卒業ということも経験しました。ＮＰＯ地域資料デジタル化研究会では、資料のデジタル化をはじめ、ＮＰＯによる指定管理者としての図書館経営、新山梨県立図書館の提案（これは入札を辞退いたしました）、沖縄市の委託を受けた、沖縄県内の公共図書館調査などの経験を積ませていただきました。

これらの経験を基に教員としての私があります。今正職員の司書として働く道は非常に狭き門となっています。ですが、司書は情報リテラシーの専門家として、あらゆる業種で活躍できるスキルを持った資格です。情報が大切でない仕事はありません。司書として働くことだけでなく、司書の＜スキル＞を生かしながら、それぞれの場所で情報の専門家として活躍することにより、それぞれのキャリアパスが向上していくと思います。その中では常に自分のスキルアップを心がけてください。

これからも都留文科大学の学生のために一生懸命勤務したいと思いますので、よろしくお願いします。

iPadと電子書籍

新教員紹介

文大に着任するにあたって

都留の春

国文学科特任教授
新見公康

四月に入ってからもこの山峡に降雪があった。エライ所に来たと感じる間もなく、桜花咲き、散り、新緑も過ぎた。飛燕もまた季節循環の早きを告げた。この感は、還暦を過ぎた焦燥感故か、新天地への順応の鈍感さ故か。

ともあれ、新職務が始まった。相手は全国各地域から来ている分別のある青年。地域の人々は温厚、ギスギスしない。仕事環境も整いつつある。申し分ない。

国語教育学実践演習Ⅰの受講生と伴に

私の任務は、「国語科」の教員を目指す学生への支援、特に高等学校の教員採用試験合格力養成。ねらいは明確である。都立高校での経験を生かし切りたい。

国語教育学特殊演習Ⅲの授業風景

どのような時代であれ、どのような社会体制であれ、教育ということは重視される。教育に携わろうとする青年の志を達成させたい。「国語科」にかかわりながら、社会問題や自然環境問題など、森羅万象に積極的にかかわろうとする教師を育てたい。学校では、国語の教科指導のみならず、生活指導・進路指導・ホームルーム経営など様々な形で生徒と接していかなければならない。生徒とのコミュニケーションを大切にし、「人間」を育て、教師自身も育とうとする姿勢を育みたい。

「読み書き算盤」「読み書き算用は世渡りの三芸」などと昔からいう。「読み書き」の重要性は、セットとして認知されていた。インプットとアウトプットは表裏一体であり、PISAの指摘をまつまでもなく、「読み書き」は昔からセットだった。「読み書き」が思索と行動そのものである。この力が世を渡る力となる。しかしながら、ここに苦手意識をもつ人は少なくない。「読み書き」を鍛錬する必要性はまだまだある。

担当各科目に於いては、「ことば」の本質への考えを深めながら、「読み書き」についての実践を基盤とする。技能訓練として「要約」「読みの視覚化作業」の練習を続けることになる。実際に高等学校に出向き授業をアシストするという科目もでき、各学校との連携を深めていけると期待している。

ジュンク堂を知らず、古書店巡りの楽しさや辛さを味わったことの無い学生が多いのは、立地の問題ではなく、時代が推移した故か。もっと自信をもって行動範囲を広げればよいのにと思いつつ、いささかシャイな若人たちとともにある環境は、当方としても若さを維持できると期待する。この齢になると健康維持は大きな課題である。体力・気力を十分に養い、今後の生活を十分に楽しめるよう心がけたい。学生と共に「学び」を深めつつ、学生たちが、日本全国に、世界に、教員として巣立つのを、可能限り応援していきたい。

新教員紹介

文大に着任するにあたって

今後取り組んでみたいこと

地域交流研究センター
特任教授
品田笑子

私は、平成19年度から地域交流研究センターの地域教育相談室を担当しています。その活動の中で文大の皆さんと一番かかわりがありそうなのは、公開講座の企画・実施だと思います。

そこで、昨年度私が講師をした講座を紹介しながら、今後取り組んでみたいことを述べたいと思います。

昨年度は、3回の講座を開催しました。1回目は、「Q-U：楽しい学校生活を送るためのアンケート（以下、Q-U）」を活用した学級集団の理解と対応の仕方がテーマでした。

Q-Uは現早稲田大学教授の河村茂雄先生（平成20年度まで本学教授）が開発された学級診断尺度です。この尺度を実施し、その結果を分析し、学級経営を行うことで実態に合った対応が可能になります。

実は、公開講座とは別に色々な校種の学校や学級から依頼を受け、Q-Uの結果をもとに学級分析することがあります。本人を見ていなくてもQ-Uのデータから話をすると「見ていないのにその通り」と先生方に驚かれます。

授業研究の助言者をすることもよくあります。中学校では、その教科の専門ではなくてもQ-Uの結果からこのような展開が合っているのではないかという話をします。すると参加者も教科の枠を超えて話し合いが出来るのです。

このような教師にとって心強い味方になりそうなQ-Uの理論や活用の仕方を広めて行きたいと思っています。

2回目と3回目の講座では構成的グループエンカウンター（以下、SGE）がテーマでした。エンカウンターとは本音と本音の交流のことです。

先日ある学会の講演会に参加し『友だち地獄（ちくま新書）』の著者である土井隆義筑波大学大学院教授の講演を聞きました。現代の子どもたちは仲間に気を遣って本音を出すことを恐れ、キャラを演じていることや、その先にある「いじり」について知り、ショックを受けました。本のタイトルに納得でした。

SGEは設定の中で本音と本音の交流をさせることが出来る手法です。これを学級経営に活用することは、今の時代には不可欠なのではないかと感じます。それを、公開講座で紹介していくことが出来たらやりがいがあります。

今年度も5月22日（土）にSGEがテーマの講座を開催しました。参加者は少なかったのですが、アットホームな中で研修が出来たのではないかと思っています。この講座は「教師力スキルアップ講座」としてシリーズ化し、様々なエクササイズの紹介をして行く予定です。

さて、私は北は北海道、南は九州まで全国のいろいろなところで研修会の講師をさせていただいています。そのほとんどで「私も文大の卒業生です。○○先生お元気ですか？」と声をかけられます。都留文科大学は全国区なんだと痛感します。地域教育相談室の活動を通して、現役の文大生はもちろん、近隣の先生方やこうした全国で活躍されている文大OB・OGの方々とつながっていけたらとひそかに闘志を燃やしています。どうぞよろしくお願い致します。

5月22日の公開講座を担当した
スタッフや参加者たちといっしょに

新教員紹介　文大に着任するにあたって

地域交流研究センターの一員として

地域交流研究センター
特任准教授
北垣憲仁

本学に地域交流研究センター（以下センターと表記します）が発足して今年度で8年目となります。私は、そのなかに位置づけられているフィールド・ミュージアム部門の一員として発足当初から関わってきました。

キャンパスにも生息するムササビ

都留では動物園や博物館の剥製ではけっして見ることができない生きいきとした本物のムササビにいつでも出会えます。フィールド・ミュージアム部門では、担当する教員や学生、市民のみなさんとそのような本物との出会いを身近に楽しめる地域の魅力を高く評価し、共感の輪を広げようとする試みを重ねてきました。

わたしたちは、森、草原、渓流、湧き水などそれぞれ異なる環境のなかに生きもの観察の拠点となる観察小屋をつくってきましたし、ムササビだけでなくリスや野ネズミ、カワネズミ、オオムラサキなど野生動物と出会えるフィールドを整備してきました。このような本物の生きものと出会える魅力ある場所を来訪者に見ていただくことで都留のまち全体を博物館にできるのではないかと考えたのです。

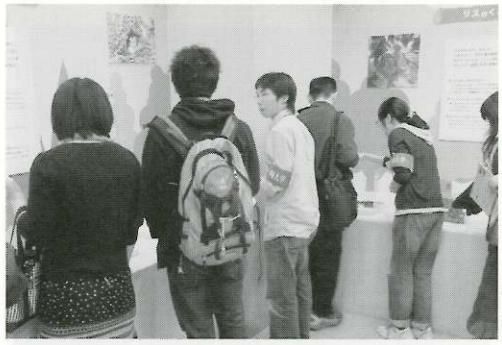
このような取り組みはけっしてセンター発足と同時にできたわけではありません。大田堯元学長による「都留自然博物館」構想、今泉吉晴本学名誉教授による「フィールド・ミュージアム構想」という30年近い研究と実践、探求の歴史がいまのわたしたちの取り組みの根幹を成しているのです。

長い時間をかけた実践とその間にできた地域のかたがたとの関わりのなかで活動の幅はさらに広がってきました。たとえば都留の過去の写真を収集してこられた奥隆行氏の写真コレクションや、家族を中心に撮影してこられた益子亮氏の写真シリーズとの出会い。それらのデータベース化の作業と、成果を活かした市立図書館との連携による展示事業。学生や市民参加による機関誌『フィールド・ノート』の発行。富士急行株式会社との富士急行沿線フィールド・ミュージアム構想。本学の情報センターと連携したムササビライブカメラ構想など、どれもがこれまでの長い取り組みがもとになっています。

本年5月28日、国立科学博物館で本学の8名の学生のみなさんとともに「大哺乳類展」の最終章に位置する展示ブースの解説をしてきました。「森からの便り」と題されたその展示は、身近な生きものの魅力を食べ痕など暮らしの痕跡を通して紹介し、自然へと誘うことをテーマとしていました。そこに展示された資料や映像はすべて都留で集め、記録したものです。来館者の多くがていねいにそれら一つひとつの資料を見て触り、都留のフィールド・ミュージアムに強い関心を示されていたのが印象に残りました。子どもたちの好奇心も刺激されたようで、生きものの本質に迫るような鋭い質問も数多く寄せられました。

いまフィールド・ミュージアム部門では、自然だけではなく人間の問題をも含んだ幅広い視野で活動を展開しようとしています。それは「人間探求」の大学としての本学の理念とも深く結びついています。本学のフィールド・ミュージアムの考えや経験を多くのみなさんと共有していけるようセンターの一員としてこれからもていねいな取り組みを心がけていきたいと考えています。

※「大哺乳類展」に関しては、24~25頁で詳しい内容と成果を報告していますので、併せてご覧下さい。



「大哺乳類展－陸のなかまたち－」での本学学生による展示解説

新教員紹介　文大に着任するにあたって

都留文科大学に着任するにあたって

保健センター
特任教授
渡辺　新

まずは、簡単に自己紹介から始めます。私は、山梨県甲府市の武田神社近くで生まれ育ちました。平成６年に山梨医科大学を卒業後、脳神経外科の臨床医として医療に従事しています。大学病院勤務時とカナダのモントリオール神経学研究所では、基礎研究も行っていました。大学病院では脳腫瘍の分子生物学を題材に生化学教室の先生と共同研究を行い、モントリオール神経学研究所では主に脳内セロトニンについての研究をしてきました。臨床医としては、脳神経外科学会専門医、脳卒中学会専門医、頭痛学会専門医として日常診療にあたっています。

この度、都留文科大学において都留文科大学の学生さん方に接する機会を与えて頂いたことを感謝致します。このようなチャンスを頂いたからには、何らかの形で、皆さんの役に立てるように、私なりの努力をするつもりです。

都留市立病院

現在の所、月に一回程度健康相談に伺う予定です。こころも体も元気な学生さんが多いとは思いますが、ずっと心身共に健康でいることは意外に難しい事です。一人暮らしをしていると生活の変化が心身に影響してくることが少なくありません。特に“心”については、脳神経や神経伝達物質の機能障害が起こると自分の努力では改善できない事が多くあり、このような場合には、無理な努力はせず、医療機関を受診して治療を受けることが重要となります。全く遠慮はしないで、相談室のドアをノックしてください。

おそらく今までの大学の先生方と全く別分野を専門とするものとして、伝えたいことが幾つかあります。本大学の学生さんの多くは、将来教員になる事が希望であると聞いています。近年、自動車免許取得時や一般の講習会などで救急救命処置法が普及しつつありますが、ここで改めてその重要性を伝えたいと思います。救急救命センター勤務経験や脳神経外科医として、一般の方や教職員が知っていると良い救命処置法や、頭部外傷を起こした時の対処法などについて話をしたいと考えています。これらは、純粋に人を助けるという意味において重要であるのは当然ですが、近年の学校や教員が必要以上に批判を受ける現状において（医師も同様の状況ですが）、これを可能な限り防ぐためにも、これから重要な分野になってくるものと思われます。実際に、クラブ活動で前日に頭部を強く打撲しているにも関わらず、翌日もスポーツを行い再度頭部打撲することで、非常に重症化してしまう事を経験します。脳震盪を起こした場合、一週間は頭部打撲を起こしうるスポーツを禁止することは、指導者はだれもが知っていなければなりません。

脳神経外科とは少し離れますが、脳内セロトニンについてもお話したいと考えています。うつ病やうつ状態に脳内セロトニンが関係していることは多くの方の知るところと思いますが、研究の進展や医療画像機器の発達などにより、脳内のどの場所で、どのような変化が起こっているかが少しずつではありますが、実際に目で見えるようになってきています。統合失調症についても同様にPETという医療機器により脳内神経伝達物質の異常が明らかにされつつあります。さらにセロトニンは自閉症にも大きな役割をしている事が分かってきています。以前から精神科領域は問診や診察が診断の中心でありました。近年はこれら科学技術の発展により、精神科疾患は脳内神経や神経伝達物質の機能障害であることが明らかになりつつあります。これらの進歩は、私が大学で学習したことと明らかに変化しています。精神疾患はこれまで、様々な偏見を受けてきました。今後、脳神経や神経伝達物質の機能障害であることが一般の方々にも知れ渡ること、さらにその機能障害の詳細が解明されることで、偏見が少しでも減っていくものと思われます。気分障害、統合失調症、うつ状態、てんかん、発達障害などは決して稀な疾患ではありません。

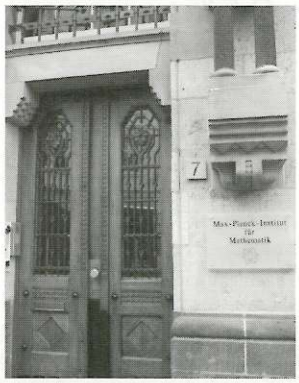
微力ではありますが、どうぞよろしくお願い致します。

学外研究報告

数楽生活を終えて

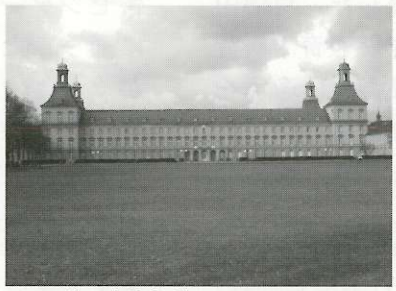
初等教育学科教授
寺川宏之

昨年度学外研究の機会を頂き、ドイツのボンにあるマックス・プランク数学研究所（Max-Planck-Institut für Mathematik）で客員研究員として刺激的な1年間を過ごすことができました。僕の専門は代数幾何学・複素幾何学ですが、その中でも複素射影多様体上の連接層の有界複体の作る導来圏とその一般化である三角圏に関するt-構造、t-安定性、安定性条件のモジュライ空間などを研究していました。また、多元環の表現論や無限次元リー代数、モジュラー形式の周辺の話題に関する多くの（古典的なのですが僕にとっては）新しい知識を得ることもできました。朝から晩までひたすら数学を考え続けるというすばらしい（wunderbar）数学漬けの生活でした。



研究所の出入口
2階から上が研究所、1階はブティックやカフェが入っている

さて、数学の話はこのくらいにしてドイツの話をしましょう。ボンはドイツ北西部のケルン地方（ノルトライン・ヴェストファーレン州、州都はデュッセルドルフ）にあり、1990年の東西ドイツ統一まで旧西ドイツの首都でした。州の名前が示すとおりライン川に臨み、ベートーヴェンの生地としても知られています。また、戦前から保養地として知られ、いまでもたくさんの年金生活者が暮らす穏やかな優しい街です。ボンの人たちにはいろいろと助けられました。1年間病気もせず何とか無事に暮らせたのは彼らのおかげです。



ボン大学本館
ハイネ、マルクス、ニーチェなどもボン大学で学んだ

ドイツと言えば「ビール！」でしょ。ドイツには1,200カ所を超えるビール醸造所があり、約5,000種類のビールが作られていると言われています。もちろん、ケルン地方にも有名な地ビールがあります。「ケルシュ（Kölsch）」といい、アルコール度数4.8％、淡い黄色で飲み口さっぱり、冷えたのが200～250mlの細長いグラスで出されます。ケルシュに限らず、ドイツ人は同じ種類のビールを延々と飲みます、それも料理なしで。腰を据えてビールを味わうのです。日本人のように「とりビー！」ということはあり得ません。夜になると居酒屋（「クナイペ（Kneipe）」といいます）ではビールとともに強いリキュールを飲みながら主人もお客も歌い、たまに踊るのです。僕のように片言のドイツ語しかしゃべれなくても仲間に入れてくれて大騒ぎです。楽しかったなあ。

ご存じの方も多いと思いますが、ドイツのパンは（僕が思うに世界一）おいしいです。ブレーチェン（brötchen）という小型の皮の堅い白いパンをよく食べましたが、これが「アルプスの少女ハイジ」に出てくる「白パン」なのです。ドイツ人はこの白パンを2つに切り、ジャムを塗ったり、ハムやソーセージ、チーズなどを挟んだりして食べます。挟む具にもいろいろな種類があって楽しめます。他にも酸味のあるいわゆる「黒パン（Schwarzbrot）」、南ドイツではビールのつまみとして欠かせない「ブレーツェル（Brezel）」などなど、うまいんですよ、本当に。また食べたいなあ。

あっという間に紙面が尽きてしまいました。あらためて、すばらしい1年をありがとうございました。話の続きはまたそのうち。ソーセージやワイン、ドイツ料理、コンサート、オペラ、お祭り、他の街の話、ドイツ人のものの考え方なども聞きたいでしょ。ああ、思い出したらビールが飲みたくなってきましたね。ということで、Ein Bier, bitte!

学外研究報告

訪問学者としての日々

国文学科教授
牛山　恵

昨年度、後期に学外研究の機会をいただき、早稲田大学の訪問学者として研究を進めることになりました。早稲田大学では、大学院教育学研究科で、町田守弘教授の教えを受けたり、大学院生の研究発表を聞いたりして、充実した時間を持ちました。また、早稲田大学の図書館は蔵書が充実しており、『日本児童文学』や『国文学解釈と教材の研究』などの雑誌を、創刊号から調査することができました。学外研究では、普段なかなかできない調査中心の研究をしようと思っておりましたので、時間を気にせずに図書館にこもっていられるというのはすばらしい時間でした。この調査の結果は、現在執筆中の論文で取り上げています。

みすゞ記念館近くの公園にあるみすゞ像の前にて。
公園は海に面していて、潮の香りがする。

調査と言えば、教科書センターに通うことができたのも、学外研究の成果です。教科書センターは、主として検定教科書を集めた図書館ですが、月・火・水しか開館していません。勤務があるときには通えませんので不自由していました。教科書センターでは、小学校国語教科書に収載された伝統文化の教材を調査しました。平成二十年版「学習指導要領」に「伝統的な言語文化」が設定されたことを受けて、小学校でも古典の学習が始まりますが、古典がこれまでどのような形で教材化されてきたのかを調べることが目的です。調査の結果は、大学の研究紀要に論文として発表することができました。

また、せっかくの機会ですから、かねてより行きたいと思っていた山口県にある金子みすゞ記念館を訪ねることにしました。金子みすゞ記念館は、下関から列車で二時間あまりの仙崎という小さな町にあります。仙崎は、おそらくみすゞの生前の頃とあまり変化していないと思われるような、静かで情緒のある町並みです。みすゞの詩や童謡を口ずさみながら町を歩いていると、ほどなく海に出ました。のんびりと海を眺めて、至福の時を過ごしました。

学外研究の期間は終わりましたが、その期間にあらたに見つかった課題がたくさんあります。研究は再び始まったところです。

金子みすゞ（本名テル）大正 12 年撮影の写真。
みすゞは明治 36 年に山口県に生まれた。大正末期、すぐれた作品を発表し、西條八十に認められた。しかし、昭和 5 年（1930 年）26 歳の若さで世を去った。没後その作品は散逸し、幻の童謡詩人と語り継がれるようになったが、矢崎節夫の努力によって、作品が再び世に出ることになった。

学外研究報告

新たな発見

国文学科教授
寺門日出男

半年間、大阪大学の客員研究員として、研究に専念した。目的は、図書館の懐徳堂文庫資料。46,000冊余の図書の外、1,000点以上もの書画・書簡・器物等が所蔵されている。

同文庫の資料は、これまで何度も利用していたが、書画については、以前から気になりつつも、じっくりと調査する機会がなかったので、今回、是非とも調べてみたいと思っていた。

これらの書画は、懐徳堂学主の子孫が寄託したもの、懐徳堂記念会が古書店等から購入したもの、市民の方から寄贈されたもの等、様々であるが、調べてみると意外にも大量の贋作が含まれていることが判明した。

特に、18世紀後半に活躍した、中井竹山・履軒兄弟の作とされてきたものは、半数近くが贋作であった。中井履軒の書の代表作として、『懐徳堂　浪華の学問所』（大阪大学出版会）に掲載されている「食毒詩幅」（写真）―子孫の寄託品であることから、最も信頼されていた作品―でさえ、贋作であることがわかり、懐徳堂記念会の職員を狼狽させた。

落款を手掛かりに、これら贋作の偽造年代を推定すると、これもまた意外にも、幕末以降のものが最も多いようである。

幕末期の大坂は、福沢諭吉や大村益次郎を排出した適塾の方が、断然有名であり、懐徳堂は全くふるわない時期であった。懐徳堂は財政が逼迫し、そのため、子孫保有の書画類が売却（このことが偽造の契機となったようである）される。明治二年、懐徳堂は閉校のやむなきに至り、やがて、地元の大阪でも、懐徳堂の記憶は忘れ去られていったと、考えられてきた。しかし、贋作書画の状況から考えると、実状は大分異なるようである。

現在、懐徳堂の認知度は決して高いとは言えず、中井竹山・履軒の名も、せいぜい山片蟠桃の師として知られる程度であろう。しかし、彼らの贋作がこれほど大量に残っているということは、明治・大正にかけて、彼らの書画に対する需要が十分にあったことの、何よりの証である。大正二年に懐徳堂が復興できたのも、大阪市民の竹山・履軒に対する敬慕の強さが、その根底にあったのではないかと思うにいたった。

半年間の調査結果の一部は、大阪大学付属図書館の司書講習会で報告させていただいたが、全容については、今後の資料収集の在り方も視野に入れながら、論文を執筆して公表する予定である。

最後になったが、このような貴重な機会を与えていただいた関係各位に、心から御礼申し上げる。

学外研究報告

ケンブリッジから、ニューヨーク、そしてカリフォルニアへ

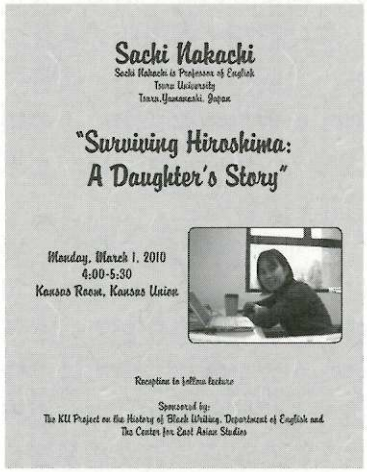
英文学科教授
中地　幸

2009年度は、英国ケンブリッジ大学（4－8月）、米国ニューヨーク大学（NYU、9－12月）、カリフォルニア大学バークレー校（UCB、1－3月）にて、客員研究員として過ごした。春から夏にかけてのケンブリッジは天国のような美しさであった。この期間は、ケンブリッジとロンドンの図書館で資料調査をしながら、芸術家キャラ・ウォーカーについての論文や演劇の劇評などを書いた。4月末にはトルコの国際学会に出席・発表をし、夏はアイルランド、スコットランド、フランスにも足を伸ばしジャポニスム関係の資料収集を行った。ケンブリッジでは授業や研究会にも参加したが、多くの点でアメリカの大学とは異なり、驚くことの連続だった。

秋からのＮＹはアッパーウエストに居を定めた。NYUに地下鉄で25分、リンカーン・センターに10分、黒人研究資料を持つハーレムのショーンバーグ図書館に15分という便利なロケーションで、時には23時の閉館ぎりぎりまで大学図書館にいることもあった。この期間は膨大な文献読破を要求される大学院のセミナーに参加しながら、英文原稿執筆に苦しむ日々でもあったが、12月31日の夜無事脱稿し、友人とセントラル・パークに新年の花火を見に行くことができた。雪が降り積もった大晦日のセントラル・パークの静謐な美しさは忘れられない。

NY滞在中は美術館制覇を心がけ、また劇場にも多く足を運んだ。有名批評家や作家と会う機会が頻繁にあるのもＮＹならではの醍醐味である。ユーゲン・ハバーマス、コーネル・ウェスト、ジュディス・バトラーが一挙に並ぶ夢のようなパネルや、サルマン・ラシュディのトーク、チヌア・アチュベの朗読会などを聞きに行くことができた。水曜日の夜は、佐々木指月によって創設されたアメリカ第一禅協会に行って、ニューヨーカーたちと座禅を組んだ。ブルックリンに住む駆け出しのアーティストや作家との交流もあり、NY生活は想像以上に刺激的なものであった。

1月からのバークレーはアフリカン・アメリカン研究の学科に所属したが、広々としたオフィスもいただき、快適な研究環境に恵まれた。温暖なカリフォルニアは人々もゆったりしており、他学科の教授たちともランチやコーヒー、時にファカルティ・クラブでワインを片手に文学談義を楽しむことができた。バークレーは有名人がさりげなくいる場所で、インド人ジャーナリストの友人に誘われてある学会に行ったら、隣の席の女性がなんとカナダの元副大統領だったということもあった。



カンザス大学で行った講演会のポスター

アメリカ滞在中はオハイオ、イリノイ、カンザスを旅行し、6つの大学で、リチャード・ライト、ネラ・ラーセン、谷崎潤一郎、広島被爆問題、ブラックプロイテーション映画について講義・講演をする機会にも恵まれた。学会発表と違って相手は学生である。学生が良い質問をしてきたら、それを褒め、学生に更に興味を持たせるように仕向けなくてはならない。教える立場で話す英語について改めて考えさせられた。また訪問校中3校は黒人大学、1校は先住民の大学で、基本的に白人学生がいない。マイノリティ大学の歴史の重みを知る貴重な機会ともなった。最後になったが、海外研修の機会を与えて下さった都留文科大学、そしてこの期間を様々な形でサポートして下さった方々に心から感謝の意を表したい。

学外研究報告

2009学外研究報告 米国のダイバーシティ

社会学科教授
野畑眞理子

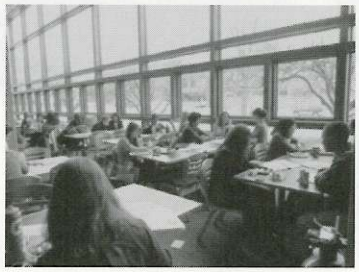
2009年度後期、学外研究の機会をいただき、米国コーネル大学労使関係学部の客員研究員としてニューヨーク州イサカ市に滞在しました。学外研究の目的は、ジェンダー平等で先進的な米国の企業経営について、とくに近年、米国企業が熱心に取り組んでいるダイバーシティについて研究することでした。

感謝祭に集まった人々

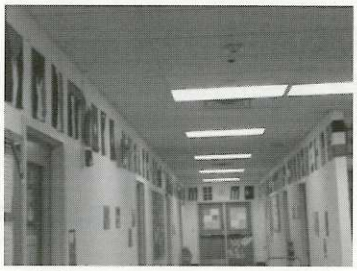
コーネル大学が所在するイサカ市は、ニューヨーク市から飛行機で1時間半、高速バスでは4～6時間離れた北西に位置し、湖、渓谷、小川そして大小の滝が点在する起伏に富んだ美しい学園都市です。

コーネル大学の学生総数は約21,000人、世界中から毎年留学生（約3,500人）や研究者（約1,200人）を受け入れており、なかでも中国、韓国、インドからの留学生や研究者の比率が高く、存在感を増しています。また、米国は歴史的にも多民族社会ですが、近年、アジアからの移民、とくに中国、フィリピン、そしてインドからの移民の増加が顕著です。コーネル大学で実感するダイバーシティ（人種・民族）は想像以上でした。学生たちは、大学での生活をとおしてグローバルな視野を身につけていくと思われます。一方、コーネル大学の日本人は非常に減少しており、長い間、日米の交流に貢献してきたイサカ日米協会は、活動を継続することができなくなったと聞きました。米国滞在中、メディアで日本が大きく取り上げられたのは、唯一、トヨタのリコール問題であったことはとても残念なことでした。

現在の米国企業のダイバーシティへの取り組みを要約すると、「多様な従業員一人ひとりを尊重し、能力を最大限活かすことができるような快適な環境を提供するために、企業は、従業員の多様性から常に学び、企業そのものを変革していかなければならない」というものです。企業を、人種・民族、ジェンダー、LGBT（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー）などのダイバーシティの観点から評価し表彰するNPO/NGOなども少なくありません。さらに、米国でダイバーシティに取り組んでいるのは企業だけではなく、あらゆる組織、団体で重要課題の一つになっています。コーネル大学も例外ではなく、「誰もが、どんな分野の教育でも受けることのできる大学」という創立の精神に始まるダイバーシティ推進の長い歴史をもち、現在も、学生、教員および職員のダイバーシティに意欲的に取り組んでいます。



大学食堂の風景



大学アパートのコミュニティーセンター　国旗がいっぱい

ジェンダーの視点からダイバーシティの状況をみると、日本の女性管理職比率は約10%（係長を含む）、一方、米国のそれは4割前後です。さらに先述のとおり、現在、米国では多くの企業がダイバーシティに積極的に取り組んでいます。日本からみると羨ましい限りですが、米国人研究者たちと議論すると、経営トップや上級管理職層に女性が少ない「ガラスの天井」を非常に問題視しているのが分かり、ジェンダー平等への強い思いに圧倒されます。

最後に、米国での研究および日常生活を支えてくださった方々に、そして、この貴重な機会を与えてくださった都留文科大学の皆様に、心から感謝いたします。

講演会だより

初等教育学科講演会の報告

初等教育学科４年
藤井翔子

３月21日（土）に、初等教育学科講演会『教師はなぜそう教えるのか？　～学級づくりの哲学～』が開催された。講師に奈良県広陵西小学校の土作彰先生をお招きして、一日限りの「土作学級」が作られた。この「土作学級」の中で使われた多くのミニネタ（学習材）は、子どもたちの興味をうまく引き出すものばかりで、土作先生が日々共にしている子どもたちの目の輝きが浮かぶようだった。

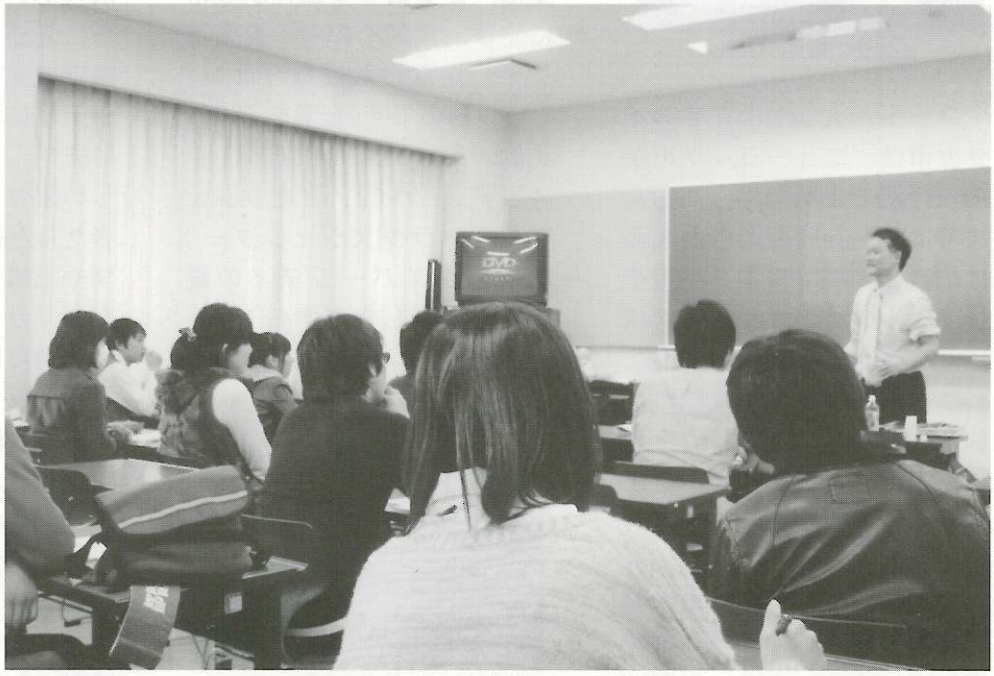
私は、二つの視点を持ち、この「土作学級」の一員となった。

一つ目は、子どもとしての視点である。土作先生によって繰り広げられるミニネタは五感を刺激し、ともかく面白い。最初は講演会ということで受身的になりがちだったが、途中からは授業を受ける一人として、土作先生から生み出される様々なミニネタに純粋に「どうなるだろう」「どうしてだろう」と考えさせられ、引き込まれていった。その一例として、理科のマシュマロを使った気圧に関する実験があげられる。ビンにマシュマロを入れ真空にすると、マシュマロはどんどん膨らんでいく。これはビンの中の空気の分子が減ったためである。このような実験により、目に見ることができない空気の分子を実際に感じさせるのである。理科が苦手だったが、「気圧」についてよく理解することができた。

身近なものをインパクトのある使い方をすることによって、子どもたちを一気に引き付ける。自然と子どもたちの中に疑問が生まれ、学びたいという気持ちが生まれる。身を持って、魅力的なミニネタを授業に組み込む重要性を感じることができた。

二つ目は、教師としての視点である。確かにミニネタも大事ではあるが、その裏にある土作理論の広さ、深さに驚かされた。土作先生は、ありふれた日常生活のふとしたひらめきを大切にし、その分野に関して徹底的に研究し、そのときの子どもたちに合ったミニネタを生み出していく。一つの知識を教えるのにも、教師がどれだけそれについて深く理解しているかということが重要であると痛感した。

私は、この講演会を通して、「なぜそう教えるのか？」という問いを大切にしつつ、子どもたちにとって何をどのように学ぶと楽しく分かりやすいのかを考え続けることのできる教師になりたいと改めて思った。



一日かぎりの「土作学級」の風景

講演会だより

英文学科 講演会の報告

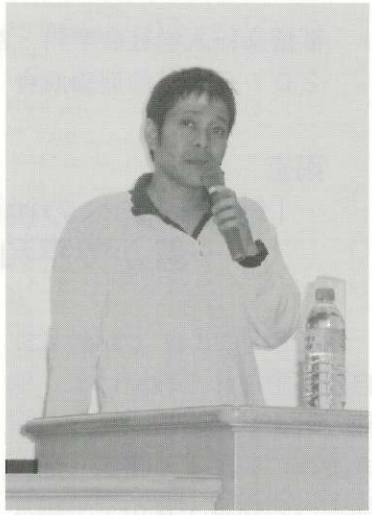
英文学科　2年
長谷部朝子

6月2日に、本学2号館において、英文学科・英文学会共催による春季講演会が開催されました。講師として、映像ディレクターの村松正浩氏をお呼びし、「映像を通してアフリカを考える」という題で講演していただきました。

村松氏は、2006年から2年間、映像隊員として青年海外協力隊に参加し、ジンバブエの映画財団やウガンダのテレビ局で現地の人々に映像制作の技術指導をしながら、共に映画やテレビ番組を制作されました。任務終了後もブルキナファソにて撮影を行うなどアフリカ支援活動を行い、現在はフリーランスとして東京を拠点に映像制作を行っておられます。

今回の講演で村松氏は、アフリカの現地の人々と仕事をする上での苦労話や学んだことをご自分で制作された映像を多用しながら話してくださいました。自分に比べ現地の人々が時間にルーズなことやものの見方の違いから困惑することもあったようですが、そのような経験を通して、「腹を立てても怒らない、場所をわきまえた服装をする、技術に頼り切らない、可能性に限界を定めない」ということが大切だと学んだそうです。

村松氏が見せてくださったアフリカの映像は、「至る所に野生の動物が生息し、貧困が激しく、開発途上である」という私が抱いていたアフリカへのイメージとはかなり異なっていました。村松氏の映像の中のアフリカでは、動物は国立公園で保護されており、都市部には車が列をなして走り、想像以上に開発が進んでいました。いかにメディアが固定観念による誇張したイメージだけを伝えている場合が多いかということを実感しました。映像の中には、学校の掃除をしている学生や、歌を歌い踊る人々、草の生い茂る原っぱで男女関係なく裸足で元気よくサッカーをし、ビニール袋をボールに見立て遊ぶ子供たちなどが生き生きと映っていました。中でも印象的だったのは、ストリートチルドレンの映像でした。



村松正弘氏

ペットボトルを集め収入を得るといった決して楽な境遇ではないはずなのに、悲壮感を漂わせない彼らの姿に心打たれました。

質疑応答の際に積極的に質問をしている人達や、講演後村松氏に歩み寄る人などがいて、参加者がいかに興味をもって熱心に耳を傾けていたかがわかりました。村松氏が、先進国の援助なしには厳しい状況であるが、ゆっくり時間が流れるアフリカの国々と、開発は進んでいるが満員電車にゆられ時間に追われる日本ではおかれている環境が異なるので単純に比較したり、優劣をつけることはできないと繰り返し言っていらしたことが印象に残っています。

村松氏のお話と映像の数々は、自分の目で見て考えることの大切さ、そしてアフリカの事を考える貴重なきっかけを私たちに与えてくれました。ありがとうございました。

講演会だより

都留文科大学社会学科・都留文科大学地域社会学会共催
２０１０年度前期講演会

雨宮　清氏
「地雷除去への挑戦
～豊かで平和な大地への復興～」

さる６月23日（水曜）に、自然科学棟Ｓ１教室にて、午後５時より雨宮清（あめみや・きよし）氏による講演「地雷除去への挑戦～豊かで平和な大地への復興」が開かれ、約200人の学生が熱心に聞き入りました。

講師の雨宮氏

雨宮氏は、南アルプス市に本社をおく山梨日立建機株式会社の社長であり、発展途上国でのその地雷除去活動は企業による平和貢献として広く注目され、国内外での講演に東奔西走されています。

雨宮氏は講演で、カンボジアをおもな事例として、まず対人地雷とその被害の実態にふれました。20世紀の戦争における大量報復戦略（一般市民を無差別に殺戮することで、敵国の戦意を喪失させる戦略）の一環として、対人地雷が開発され、ベトナム戦争やカンボジア内戦（1990年終結）の際におびただしい数の地雷が散布され、全国土に無差別に埋まっています。このため、一般の農民家族が耕作中に地雷に触れ、死亡したり手足を失う例が後を絶ちません。学校の通学中に死傷事故にあう子どもたちや、地雷原のただ中にある難民キャンプで暮らす人々の姿が、映像で紹介されました。

雨宮氏はもともと、ブルドーザーやクレーンを開発・整備・販売する会社を経営しており、内戦終結後の1994年、「国土復興が進むだろうから、商機がある」という思惑でカンボジアを訪問しましたが、そこで手足を失った多くの子どもたちに出会い、衝撃をうけました。農村で出会ったあるおばあさんの「日本人なら私たちを地雷から救ってほしい」という一言に、亡くなった母の「人の役に立つ生き方をしなさい」という口癖を思い起こし、深く動かされたといいます。

以来、少人数のスタッフと夜や休日に、地雷を爆破処理しながら掘り起こせる、1000℃の高温と爆風に耐えられる改良型油圧式ブルドーザーの技術開発を進め、実験で試行錯誤を繰り返した後、４年かかって地雷除去機を完成させました。苦労はあったが、日々「子どもたちの笑顔」と「日本の技術者としての使命感」を考えたといいます。

その後約10年、カンボジア、アフガニスタン、ニカラグア、アンゴラなどに約60台の地雷除去機を輸出しています。カンボジアでは地雷原だった土地がいま緑豊かな農地や小学校に生まれ変わっています。ニカラグアでは90％以上の地雷が除去できました。しかしアフガニスタンでは戦乱により除去活動は中断しています。雨宮氏自身も爆風で右耳の聴力を失いました。

文大の学生にもぜひ平和貢献活動に取り組んでほしいという言葉で講演を締めくくられました。

（社会学科教授　進藤　兵）

地域社会学会学生役員と

講演会だより

国文学科創設50周年記念講演会について【案内】

国文学科長　新保祐司

日　時	8月7日土曜日	講　師	久保木哲夫名誉教授
	午後1時30分から5時	演　題	「国文学と筆跡の認定」
場　所	2号館101教室	講　師	鷺　只雄名誉教授
入場料	無料	演　題	「壺井栄論」

都留文科大学文学部国文学科は、昭和35年（1960）4月の創設以来、本年50周年を迎えることとなりました。その間、5833人の卒業生を輩出してまいりました。

国文学科として立派な伝統を築き得たのも、先輩教員の先生方、同窓会の皆様、大学事務局の職員の方々のご尽力の賜物と篤く感謝申し上げますとともに、この誇るべき歴史を今後ともひきついでいかなければならないとの覚悟を、現在国文学科をあずかっております全教員が新たにしているところです。

この大きな節目を祝し、来る8月7日（土）の午後に記念講演会を開催することとなりました。講師は、国文学科の教員を長くつとめられ、発展に多大な貢献をなされた2人の先生にお引き受けいただきました。

元学長で名誉教授の久保木哲夫先生が「国文学と筆跡の認定」という演題で、また名誉教授の鷺只雄先生が「壺井栄論」という演題で、それぞれ講演されます。

長年の御研究の成果による興味深いお話がうかがえるものと今から、とても楽しみにしております。お誘い合わせの上、ご参加くださいますようお待ち申し上げております。

講演会の後には、記念パーティーを催しますが、同窓会の皆様の懇親を深める機会となることを願っています。また、ご出席の方々から様々な情報や国文学科のあり方について忌憚のないアドヴァイスなどを頂き、今後の一層の発展に役立てたいと考えております。

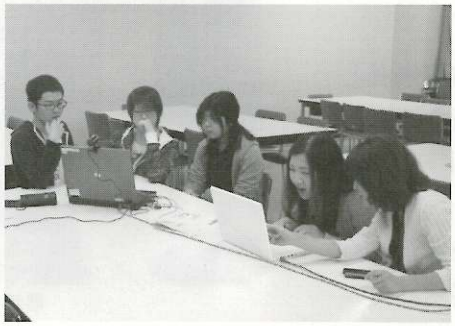
平成22年度 第1回情報センター所属学生指導員講座

平成22年5月27日（木）午後6時30分より情報センター所属の学生指導員による「Skype体験講座」が実施されました。本学の学生・教職員の方々を対象とする講座でしたが、今回の参加者は学生を中心に8名と、やや寂しい開催となりました。

この講座は、学生指導員たちの提案で、インターネット回線を利用したビデオ通信を体験してみようというもので、1107教室（1台）・2102教室（3台）の計4台において、Skypeのダウンロード・インストール方法からはじまり、通話・ビデオ通話・会議通話・ファイル送信・画面共有などを体験してもらいました。

ほとんどの参加者があまり経験したことがないという方々で、最初は戸惑いがあったように見受けられましたが、徐々に操作の方法が分かるようになり、帰る頃になると「とても良い経験ができた。」「自宅に帰ったらぜひ活用してみたい。」などのご意見をいただきました。

次回の情報センター主催講座は日程・講座名は未定ですが、決まり次第、掲示及び学内サイトなどへお知らせいたしますので、学内の皆様のご参加をお待ちしております。



「第6章　ムリネモの森へようこそ」

ー「大哺乳類展」への展示協力と協賛をとおしてー

地域交流研究センター長　杉本光司

国立科学博物館と都留文科大学。この２つをつなぐものは何でしょうか。平成22年３月13日から６月13日までの３か月間、国立科学博物館で開催されました「大哺乳類展」（陸のなかまたち）において、その答えを示すことができました。

展示会場入口のスロープ

本学では、30年ほど前から、自然豊かな、この都留市という地域全体を博物館にみたて、ここに生きる多くの動植物、そして人々を通して自然と触れ合う豊かな人間性を育んでいこうという『都留自然博物館』構想が生まれました。初等教育学科の今泉吉晴教授（当時）が中心となって、授業だけでなく、課外・社会活動を通して多彩な取組みを実施してきました。この取組みは、地域交流研究センターの設立当初から、活動の柱の一つとして、『フィールド・ミュージアム』部門として掲げてまいりました。この取組みは、平成19年度には文部科学省の環境ＧＰとして採用され、初等教育学科の坂田有紀子教授が中心となり、多様な実践や試みが行われました。そして、時代は改めて『フィールド・ミュージアム』について考えることを教えてくれました。

今回の『大哺乳類展』では、全体監修者として、本学の今泉吉晴名誉教授が当たることになり、その展示の中に、『フィールド・ミュージアム』に関するコーナーを設け、そこに、これまでの本学での取組みの成果を展示するという構想により、本学に対して展示協力の要請がなされました。この「大哺乳類展」は（陸のなかまたち）ということで、フィールド・ミュージアムの中でも、身近に生きる動物をテーマに研究を続けてこられた北垣憲仁特任准教授が、その構想にあった様々な資料の収集を行いました。

また、この展示協力という機会を、都留文科大学の新しい広報手段の一つとして活用できないだろうかということで、理事会に対して『大哺乳類展』への「協賛」の依頼を広報委員会とともに申請いたしました。正式に理事会より承認の回答を得られたことは、まさに新たな第一歩を踏み出した瞬間でした。これまで高校や受験生やその保護者向けに実施していた広報活動に加え、都留文科大学の存在を広く社会に周知させるための新たな取組みが、平成22年３月13日、『大哺乳類展』の開始と同時に始まったのです。新年度に入って間もない、４月６日には10万人目の入場者を迎え、予想以上の好評さとともに、都留文科大学の

展示会場

名前が広がり始めました。

この『大哺乳類展』では、第1会場（1章～5章）においては、主に動物たちのはく製や骨格模型展示を中心に、シートンや星野道夫といった研究者や写真家の紹介展示も行われておりました。そして、第2会場では、「第6章　森からの便り」というテーマで、ムササビ、リス、ネズミ、モグラのそれぞれ1文字を組み合わせた「ムリネモ」に代表される、身近な動物たちの残した痕跡をとおして、それらの動物たちと出会う方法について、北垣特任准教授が収集した標本資料、写真、映像等によって説明されていました。また、都留文科大学の紹介パネルとともに、環境GPでの成果の一部である、「フィールド・ノート」

講演会で標本にふれる小学生

や「先生の卵たちに贈る教材集」等も展示しました。

4月19日には、秋篠宮ご夫妻が御来館され、特に秋篠宮妃紀子様からは、展示物の一つ「先生の卵たちに贈る教材集」に対して強い関心を寄せられるという、予想もしない出来事をもたらして頂きました。この冊子の他にも、フィールド・ミュージアム関連の資料も併せて、秋篠宮家に届けさせて頂くことになり、関係者一同に大きな喜びと希望を与えてくださいました。

一方、この開始以来、「第6章」の展示全体に

国立科学博物館日本館での講演会

対する多くのご意見やご指摘を頂き、主催者側との交渉の結果、ゴールデン・ウィーク間近の5月1日の閉館後に、北垣特任准教授の指示により、展示全体の改善工事が実施され、より分かりやすく、丁寧な展示へと生まれ変わりました。また、この展示スペースを利用した、本学学生による「展示解説」や北垣特任准教授によるギャラリー・トーク、そして講演会の開催等、展示協力および協賛団体ならではの特別プログラムを実施することができ、そこに参加した人たちが熱心に聞き入り、特に子どもたちからの質問は会場をより一層盛り上げてくれました。

入場者も最終的には30万人を超え、都留文科大学にとって『大哺乳類展』への協賛という広報手段としての成果は、新しい分野への周知、また社会貢献という面においても高い評価を得ることができました。この取組みを通して、多くの便りも届いており、新しい交流の場も生まれつつあります。今回の国立科学博物館での様々な経験は、都留文科大学の新しい歴史の一幕を飾るに相応しい時間であったと考えます。

ギャラリー・トークと展示解説を終えて

最後に、ここに寄せられた、たくさんの評価の声を、今回の取組みを支えて頂いた方々、そして「協賛」という機会を与えて頂きました多くの方々に捧げたいと思います。

昨年度の就職状況を振り返る

就職委員会委員長　千葉立也

平成21年度（前期卒業生も含めて）、本学では667名の卒業生を送り出しましたが、就職希望者511名の89.8％、459名が決定いたしました。この3年間94～95％台を維持したのと比べると（昨年度は94.4％）、5％程度低下しています。民間企業への就職者数の落ち込み（一昨年度の315名から252名へ）によりますが、教員、公務員における就職者数（臨時採用を含む）の増加で、なんとか90％に近いところまでもち直せたという印象をもっています。昨年秋ころは、前年に比し、かなり低い内定率の状況で、先行きをかなり心配しておりました。

就職先の内訳は、次頁の表に示した通りです。教員として採用されたものは公立、私立合わせて169名、この3年間増加を続けており、一昨年度に比べても16名増という好成績でした。公立学校で正規採用となったものも77名にのぼりました。公立学校では、北海道から沖縄まで全国38都道府県に及び（臨採を含む数字）、一昨年度の32都道府県よりも広がりました。正規採用では採用数の多い首都圏の比率が高い傾向が続いていますが、昨年度は愛知、静岡、広島、宮城、富山、山梨で複数の合格者がでました。3月末までに得られた情報では、既卒者の採用も126名にのぼっています。毎年同じ基準で比較できるものではありませんが、一昨年度は40名ということでしたので、大きく増えています（臨採も含む）。なかでも山梨県での採用が19名と、大きく改善されました。

民間企業の採用手控えもあってのことかもしれませんが、公務員は24名から38名と大きく増えました。一昨年度は少なかった男子が増えています（男女同数に）。社会学科男子の公務員就職が増えた結果です。

大きく減った民間企業就職者ですが、製造業が半減した結果、さらに第三次産業が主という傾向が強まりました。全般に減っていますが、サービス業は一昨年度並みでした。

また、資料としては示していませんが、大学院などへの進学者は53名でした（専門学校や大学の研究生・科目等履修生などは13名）。ほぼ一昨年度並みですが、海外留学は7名（女子5名）に増えました（一昨

今年5月に行われた学内合同企業説明会の様子
（3号館ロビー）

平成22年3月卒業生　就職先一覧

■初等教育学科

桔梗屋
サンウェーブ工業
ミズノ
中日本バンリース
コロロ発達療育センター
個別指導塾　アイゼミ
クリエイト・レストランツ
朱輝
ドン・キホーテ
東海澱粉
福留
アール・アンド・エー・コミュニケーション
アーマミ
トラジ
ノバレーゼ
オーレンジ
ノジマ
ベイシア電器
オギノ
バックスグループ
静岡銀行
日本郵政
笛吹農協
みなみ信州農協
NPO法人ワーカーズコープ
山梨県立ゆずりはら青少年自然の里
社会福祉法人芙蓉会
北海道教育委員会
宮城県教育委員会
栃木県教育委員会
茨城県教育委員会
埼玉県教育委員会
千葉県教育委員会
千葉市教育委員会
東京都教育委員会
神奈川県教育委員会
横浜市教育委員会
川崎市教育委員会
相模原市教育委員会
山梨県教育委員会
長野県教育委員会
新潟県教育委員会
富山県教育委員会
石川県教育委員会
福井県教育委員会
静岡県教育委員会
浜松市教育委員会
愛知県教育委員会
名古屋市教育委員会
岐阜県教育委員会
三重県教育委員会
大阪府教育委員会
神戸市教育委員会
島根県教育委員会
香川県教育委員会
広島県教育委員会
広島市教育委員会
島根県教育委員会
徳島県教育委員会
福岡県教育委員会
大分県教育委員会
鹿児島県教育委員会
沖縄県教育委員会
大月短大付属高等学校
学校法人津田学園
中津市役所
昭和町役場
茅ヶ崎市役所
岡谷市役所
警視庁
都留文科大学

■国文学科

ジャパンレジャーサービス
メガネのハラダ
安田倉庫
駿河茶業
トマル
バブ日立ソフト
リステルグループ
しんぶん赤旗編集局
鹿島ブックセンター
ワタミの介護
メディセオ
丸井
スタッフ・アクタガワ
エフルート
エフジー武蔵
小坂工務店
富士ゼロックス山梨
松栄
東急ストア
KtoONE
クラシック
リオチェーン
エービーシー・マート
ジーエークロッシング
アークシステム
富士エンジニアリング
北陸銀行
山梨中央銀行
甲斐ゼミナール
蒼翔塾
紫苑塾
ＪＡ静岡市
郵便局
富山県生活協同組合
栃木県教育委員会
群馬県教育委員会
さいたま市教育委員会
東京都教育委員会
神奈川県教育委員会
山梨県教育委員会
新潟県教育委員会
富山県教育委員会
静岡県教育委員会
愛知県教育委員会
岐阜県教育委員会
京都府教育委員会
同志社中学校
法務省矯正局
甲府市役所
笛吹市役所
西桂町役場
川上村役場
都留文科大学

■英文学科

中野倉庫運輸
中島董商店
Ｂ＆Ｐ
ノジマ
松屋フーズ
Ａs-meエステール
イービーエム
カネスエ
角上魚類
クリエイト・レストランツ
ザナックス
ランバーテック
Ｃ＆Ｃグループ
フォーブス
ユニー
ニトリ
トラヤ
オーナメントサービス
マイクロデータ
日産プリンス福井販売
山梨スズキ販売
三城
たちばな
オリーブ
アールケイエンタープライズ
小野
ブックオフコーポレーション
ＣＬＣコーポレーション
十和田
ホテルインターコンチネンタル
東京ベイ
高山グリーンホテル
静岡中島屋ホテルチェーン
ＡＮＡエアサービス東京
松本電気鉄道
図書館流通センター
関東物産
日本サード・パーティ
桔梗屋
フクタカ
ソラン
ウエアハウス
共立メンテナンス
エレーム
いずみ書房
盛岡タイムス社
北陸銀行
山梨中央銀行
秀英予備校
甲斐ゼミナール
佐鳴予備校

年度は１名)。数が少なく毎年の変動も大きいのですが、勉学の継続のスタイルとして、本学でも定着してきたとみることができるのではないでしょうか。

以上、昨年度の就職・進学状況の特徴をまとめました。卒業生のうち就職決定者と大学院進学者を合わせると８割弱となりますが、未決定の卒業生もそれぞれの進路を切り開くべく努力していることも忘れるべきではないでしょう。

入学時からのキャリア形成支援に向けた取り組みとして、今年度から３日に増えたオリエンテーションの期間を活用して、２年生向け、３年生向けに分け、教員、公務員、民間向けの就職指導を、キャリアサポート室のアドバイザーを講師に行いました。

また、民間企業への就職支援として、昨年度から学内での合同企業説明会を開催しています。今年度もすでに第１回目を行いました。徐々に参加者も増えてきたと思います。企業面接には「慣れ」も必要ですので、こうした機会を活用して、自分の「売り」を十分発揮し希望する仕事につくチャンスを獲得できるようにしてもらいたいと願っています。

教員志望者への支援は、同窓会の皆さまの強力なバックアップが本学の強みとなっておりますが、この強みをなんとか他にも広げていきたいものです。

(以上は個人的な見解です)。

表１　2007～09年度の就職関係データ

	2007年度	2008年度	2009年度
卒業者数　A	642	683	667
就職希望者数　B	490	521	511
就職決定者数　C	467	492	459
大学院等進学者　D	47	53	53
就職率　C/B	95.31%	94.43%	89.82%
進路決定率（C+D）/A	80.06%	79.80%	76.76%

表２　2010年３月卒業者（前期卒を含む）の就職先別人数

A

教員	小学校	129
	中学校	19
	高等学校	9
	特別支援	4
	私立学校	8
	教員合計	169

B

公務員	国家公務員	2
	地方公務員	36
	公務員合計	38

C

民間企業	農業	1
	建設業	6
	製造業・電気ガス	16
	運輸通信業	24
	卸小売業	76
	金融保険業	21
	不動産業	7
	サービス業	82
	情報処理	19
	合　計	252

D

公立学校都道府県別採用数（臨採含む）				
北海道	2	愛知＊	8
宮城	3	岐阜	3
茨城	3	三重	1
栃木	3	京都	1
群馬	3	大阪	1
埼玉＊	4	兵庫＊	2
千葉	11	島根	3
東京	15	広島	4
神奈川＊	36	徳島	2
新潟	3	香川	1
富山	2	福岡	1
石川	4	大分	2
福井	4	宮崎	1
山梨	26	鹿児島	2
長野	3	沖縄	1
静岡＊	6	合計	161

＊当該県の政令指定都市も含む

文理学院
Ikoma Language School
四国電力
ＮＨＫ営業サービス
宮崎県農協中央会
北海道教育委員会
茨城県教育委員会
栃木県教育委員会
群馬県教育委員会
千葉県教育委員会
東京都教育委員会
神奈川県教育委員会
山梨県教育委員会
長野県教育委員会
石川県教育委員会
愛知県教育委員会
兵庫県教育委員会
宮崎県教育委員会
学校法人中延学園
静岡北高校
日本女子体育大附属二階堂高校
多賀城市役所
那須烏山市役所
青森県警察本部

■社会学科

関東自動車
オンテックス
阪急阪神ホテルズ
コミット
ゴトー
ALL CONNECT
ドン・キホーテ
マリアージュ諏訪
ヤオコー
ワタキューセイモア
ダイナム
サイゼリヤ
オオタアミューズメント
とんでん
Step Japan
システムフロンティア
エンチョー
杉本呉服店
キノシタ
栄光
ジャパンビバレッジ
インテック
マネージメントサービス
インターナカツ
ＡＢＣ
グランディハウス
ハウスコム
プリンスホテル
青山商事
マックスバリュ東海
オギノ
カワチ薬品
ローソン
東急コミュニティー
東京インテリア家具
桔梗屋
中部食品
文理学院
明光義塾
北國新聞社
山梨中央銀行
中央労働金庫
信金中央金庫
沼津信用金庫
遠州信用金庫
信金東京共同事務センター
茨城県信用組合
越前たけふ農協
ＪＡ信州うえだ
ＪＡあいち三河
農事組合法人美の郷
郵便局
郵便事業
茨城県教育委員会
千葉県教育委員会
神奈川県教育委員会
相模原市教育委員会
山梨県教育委員会
静岡県教育委員会
浜松市教育委員会
福井県教育委員会
愛知県教育委員会
享栄学園鈴鹿中・高校
西武学園文理小学校
長野県庁
いわき市役所
横浜市役所
笛吹市役所
三島市役所
菊川市役所
海津市役所
福山市役所
六ヶ所村役場
警視庁
山梨県警察本部
新潟県警察本部
長野県警察本部
愛知県警察本部
石川県警察本部
鹿児島県警察本部
都留文科大学
山梨県立大学

■比較文化学科

ファナック
村田重機
栃木トヨタ自動車
ネッツトヨタ山梨
富士フィルムロジスティックス
エイジス
コメヤ薬局
レオパレス２１
AKAIKE スキンケアセンター
トムキ
エルナー
ダイナム
ナカムラ
古名屋
佐川急便
ジャノメクレディア
キユーソー流通システム
河内屋
エービーシー・マート
アール・アソシエイツ
くらコーポレーション
豊商事
明光ネットワークジャパン
くまざわ書店
ダイナム
ＡＢＣ　Cooking Studio
ＳＫＣサワダ建築企画
たちばな
パンダイロジパル
ヨネックス
マリアージュ
ユニー
ニトリ
ヒロコーポレーション
ノジマ
ジャパンエコロジー
ジャパンイマジネーション
ヴイ・ディー・エフ・サンロイヤル
善都
エヌワーク
コダマコーポレーション
ドリームダブルコーポレーション
バイオテック
ホテル玄　掛川
ユニコン
マルハン
ダイレクトマーケティンググループ
ワールドインテック
システムシンク
永池
ヘルセ
ホーマック
富士通エフサス
秀永
八十二システム開発
セゾンファクトリー
パソナ
エイチ・アイ・エス
東京急行電鉄
立山黒部貫光
いずみ書房
ニッセイ同和損害保険
清水銀行
山梨中央銀行
青森銀行
みちのく銀行
郵便局
ＪＡ新岩手
日本航空学園
全労済
山梨県社会福祉協議会
法務省矯正局
千葉県庁
東白川村役場
山梨県警察本部

文大生はヤル気がある！？

～2009年度「学生による授業アンケート」の結果から～

ＦＤ委員会委員長　樋渡　登

2008年度に引き続き2009年度も前期後期の二回、学生による授業アンケートを実施しました。そこで本年度アンケートについて総括してみました。

参加者率〈表1〉　参加率を前年2008年度と比較すると全教員で前期が61.2％から58.1％に、後期が64.4％から56.9％にいずれもダウンに、専任・非常勤別では専任が前期50.0％から61.3％に上昇したものの、後期では75.0％から51.4％に落ち込み、非常勤の場合は2008年度前期65.6％・後期60.9％から2009年度は前期57.1％・後期58.5％といずれも前年度を下回っています。やや低調な初等教育学科と国文学科の先生方の参加を望むものです。

評価の傾向〈表2〉　全体的に見て、セクションＢ学生の「授業の取り組みについて」[(前)3.85;(後)3.84] セクションＣ「授業の進め方について」[3.98：4.09] セクションＤ「授業内容について」[4.00：4.10] セクションＥ「授業成果について」[4.00:4.12]となっていて、５段階のランク４前後をキープしており、この意味では授業展開がスムーズに行われているといえそうです。各項目毎に見ると、問３「授業時以外の予習復習発展的努力」にグレード３を少し上回る程度のところが気になるし、問４の「授業内容の理解」も４を少し下回り、問15「テーマへの今後の意欲」もそうした傾向が見られます。履修動機にもよるますが、問３については教える側の工夫も必要でしょう。〈表2〉の授業形態別評価では今回から「演習科目」も加え４種目にしました。結果は前期･後期ともに「実習・実験・実技科目」が評価が高かったようです。それに対し前期では講義科目が低くあらゆるセクションで低ランクになったのは問題で、問４・問８あたり改善が望まれます。後期では外国語科目のセクションＣについてはそれがいえそうです。ただ前後期通じて演習科目の問７補助教材の活用が評価されているのが目をひきます。

学科別評価傾向〈表3〉　学科別のアンケートでは前期・後期ともに初等教育学科の評価が高いのが目につきます。対し前期では社会学科がセクションＣ・Ｄで、後期では国文学科の評価が低かったのが気になります。特に国文のセクションＥでは前・後期とも相対下位ランクですから一考すべきかもしれません。

履修動機別傾向〈表4〉　今回のアンケートでは、選択理由の「１.必修科目」項目から「２.講義要項に興味」「３.授業分野に興味」「４．よい授業との評価」「５．将来役立つ」「６．単位の取りやすさから」「７．空き時間だったから」の７項の数値も把握できるようにしました。それからは、６「単位」は1,5%前後、７「空き時間」４％強と、こちらが予想したほど後ろ向きではないことが分かります。ただし１「必修」が前期49,8％、後期48,1％と言うなれば受講生の約半数が「必修」で、「やむなく」受けている消極受講の潜在性は高いかもしれません。しかし２～５も各10％前後存在することは、彼らの意欲の現れとみるべきでしょう。

今後に向けて　大学設置基準改定によるＦＤ（集団的職能研修）の義務化に伴い、各大学でもすでに模索の時代から実行の時代へと移行しつつあり、そのための研究発表会や研修活動が活発に行われるようになってきました。本学でも情報公開時代を迎えＦＤ活動

表１　アンケート実施率（2009年度）

	全教員		専任教員		非常勤講師	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期
総　数	322名	313名	75名	72名	247名	241名
実施数	187	178名	46名	37名	141名	141名
実施率	58.1%	56.9%	61.3%	51.4%	57.1%	58.5%
	全科目	全科目	専任科目	専任科目	非常勤科目	非常勤科目
総　数	702科目	705科目	202科目	199科目	500科目	506科目
実施数	299科目	268科目	80科目	56科目	219科目	212科目
実施率	42.6%	38.0%	39.6%	28.1%	43.8%	41.9%	

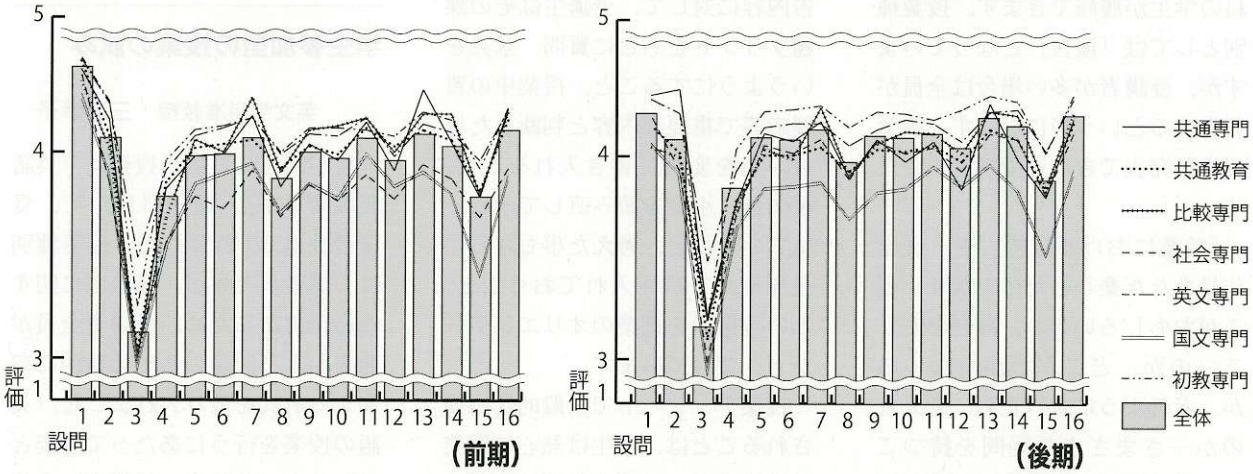
	再掲（専任教員学科別内訳）									
	初等教育学科		国文学科		英文学科		社会学科		比較文化学科	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
総　数	26名	26名	12名	10名	10名	10名	14名	13名	13名	13名
実施数	12名	13名	8名	3名	6名	8名	13名	7名	7名	6名
実施率	46.2%	50.0%	66.7%	30.0%	60.0%	80.0%	92.9%	53.8%	53.8%	46.2%

※情報センターは、比較文化学科に含む。

表2　授業形態に見た各項目の平均値（2009年度）

設問　設問文	全体		講義科目		演習科目		外国語科目		実習・実験・実技科目	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
B　あなた自身の授業への取り組みについて　セクション平均点	3.85	3.84	3.72	3.77	4.07	4.11	4.00	3.91	4.24	4.05
1．あなたはこの授業によく出席しましたか。80％程度（3回程度の欠席）を「普通」とし、5段階で答えてください。	4.42	4.23	4.38	4.21	4.50	4.33	4.42	4.18	4.62	4.35
2．授業に出席したときは、授業に集中し、授業内容を理解する努力をしましたか。	4.07	4.10	3.93	4.01	4.30	4.36	4.20	4.17	4.64	4.47
3．授業中以外の時間に、予習、復習あるいは授業内容を発展させるための努力をしましたか。	3.11	3.17	2.91	3.05	3.46	3.63	3.50	3.58	3.33	3.22
4．授業の内容をよく理解できましたか。	3.78	3.86	3.65	3.81	4.01	4.11	3.87	3.72	4.37	4.15
C　授業の進め方について　セクション平均点	3.98	4.09	3.89	4.05	4.19	4.29	4.01	3.95	4.36	4.34
5．説明の仕方あるいは指示の仕方は、理解しやすかったですか。	3.98	4.11	3.88	4.06	4.20	4.31	4.01	3.92	4.49	4.44
6．話し方（声の大きさや明瞭さなど）や板書は、わかりやすかったですか。	3.99	4.10	3.88	4.04	4.22	4.33	4.05	3.98	4.48	4.45
7．プリント、ビデオ、教科書など教材の使われ方は授業内容の理解を助けるものでしたか。	4.07	4.15	4.04	4.16	4.22	4.31	4.08	3.99	4.11	4.14
8．学生の反応や理解度に応じた授業の進め方でしたか。	3.87	3.99	3.77	3.93	4.13	4.22	3.91	3.89	4.35	4.32
D　授業内容について　セクション平均点	4.00	4.10	3.93	4.07	4.18	4.31	3.99	3.93	4.40	4.33
9．授業内容はわかりやすく整理されていましたか。	4.00	4.12	3.92	4.08	4.18	4.28	4.02	3.97	4.48	4.40
10．授業の内容は、知的な刺激にあふれ、興味深いものでしたか。	3.97	4.11	3.91	4.09	4.17	4.34	3.93	3.90	4.34	4.30
11．授業の目標、内容・構成は、講義要項などで事前に示されたものに沿っていましたか。	4.07	4.13	3.99	4.09	4.22	4.35	4.10	4.00	4.45	4.34
12．授業のレベル（難易度）は適切でしたか。「最も適切」をYes、「最も不適切」をNoとして答えてください。	3.96	4.06	3.91	4.04	4.15	4.25	3.91	3.85	4.34	4.28
E　授業成果について　セクション平均点	4.00	4.12	3.93	4.10	4.20	4.37	3.99	3.98	4.36	4.27
13．この授業を履修したことで、この分野に関する新しい知識や考え方、技能などを修得できましたか。	4.09	4.21	4.03	4.18	4.30	4.46	4.03	4.01	4.50	4.43
14．この授業を履修したことで、ものの見方や興味・関心を広げることができましたか。	4.03	4.17	3.99	4.16	4.20	4.38	3.95	3.93	4.34	4.25
15．この分野あるいは取り扱われたテーマをさらに勉強していきたいと思いますか。	3.78	3.90	3.70	3.86	3.97	4.16	3.84	3.88	4.03	3.96
16．総合的に考えて、この授業を履修して有意義であったと思いますか。	4.11	4.22	4.01	4.18	4.33	4.49	4.14	4.12	4.57	4.43

表3　各学科専門科目・共通科目別に見た項目の平均値（2009年度）



についても、もはや対岸の火事で済ませる訳には行かない状況になってきています。周辺の大学状況では、山梨大学ではほぼ全員で80～90％の科目実施率、高崎経済大学では、半ば強制的実施でほぼ全教員、実施科目ほぼ97％、山梨県立大学でも全科目・全教員の参加ということになっているそうです。アンケート項目や実施時期などに問題はあるかもしれませんが、より実効性のあるものとするために、今後改善を図っていきたいと思いますので御意見をお寄せ下さい。

表4　Aこの授業を履修した主な理由（2009年度）

設問　理由	前期（%）	後期（%）
1．必修科目だった	49.8	48.1
2．講義要項を読んで興味を持った	16.3	17.4
3．授業の分野に興味があった	12.1	12.6
4．良い授業と聞いていた	3.1	3.4
5．将来役立つと思った	7.8	7.2
6．単位を取りやすいと思った	1.4	1.2
7．この時間が空いていた	4.4	4.0
8．無効回答	5.1	6.1

私はこのように授業工夫に取り組んでいます

～2008年度「授業工夫アンケート」からの事例報告～

ＦＤ委員会では、前阿毛委員長の強いリーダーシップのもとに、本学の先生方全員に授業についての工夫アンケートを2009年２月に実施しました。その結果については教授会等においても報告があり、アンケートそのものも大学内ポータルサイトで教職員用を開いていただくと、「授業の工夫　アンケート」として匿名ではありますが、すべて公開されご覧いただけるようになっています。

今委員会では、そのうち特におすすめのアンケート回答を委員の互選で選び、その先生に直に一筆書いていただくことにしました。今回は都合で４人の先生方になりましたが、授業に対する取り組みについて具体的に寄稿していただくことが出来ました。

授業形態や方針等ははいろいろありましょうが、参考にしていただければ幸いです。

「授業の工夫アンケート」から

一例の紹介

国文学科教授　**阿毛久芳**

私が回答した授業「読書Ｂ」は、１年対象の共通専門科目で、５学科の学生が履修できます。授業種別としては「演習」となっていますが、受講者が多い場合は全員が報告するという形にならず、残念ですが発表できない受講者もいます。

「授業における目標」を「文学作品をただ楽しむだけでなく、どこがおもしろいのか、なぜおもしろいのか、どこがわからないのか、どのように受け止め、考えたのか―さまざまな疑問を持つこと、その疑問を解決する方法、調べ方を学ぶこと」としました。与えられるものをただ受け取るのではなく、自分から与えるものを創り出していく、そのプロセスを体験することに重点をおいているのです。

「授業において工夫していること」で「課題プリント」（展開・表現・内容に関する疑問・調べた事項）を例に挙げています。演習ですから報告の後の質疑応答をしっかりやってほしいという希望を実現させるための方策です。「発表者以外の受講生は事前に課題プリントを作成してくること。発表者の報告内容に対して、受講生はその課題プリントをもとに質問、意見をいうようにすること。授業中の質疑応答で重要な内容と判断した場合、色を変えて書き入れること。授業後、小説を読み直して改めて気づいたこと、考えた事もさらに色を変えて書き入れておくこと」という指示を授業のオリエンテーションでしています。

授業アンケートで全般的に指摘されることは、学生は熱心に授業を受けるが、予習、復習はそれほどしていない、ということです。この「課題プリント」は予習、復習の跡をはっきりと刻みつけるものとしてあります。意見を求められた時に「わかりません」「ありません」という答えは、この授業においてはないということを事前に伝えます。

一小説につき２～３時間ほどの配当ですが、一編が終わるごとに各自の「課題プリント」を回収し、評価、コメントをつけ返しています。受講生のプリントが濃密になってくるのが楽しみです。

学生参加型の授業の試み

英文学科准教授　**三浦幸子**

私が回答した担当授業は『英語科教育法Ｂ』（通年科目）で、受講者数は59名でした。授業種別は「講義」ですが、指導法に関する科目であるため、受講者全員が発表および討論の形で積極的に参加する形式を取り入れました。「英語の授業を行うにあたって必要とされる力（英語力、授業力）を伸ばすこと」と「学校英語教育に関する基本的事項の理解に基づき自分自身の英語教育観を形成すること」などの目標達成のためには、教師主導の講義だけではなく、自ら経験することで自分の穴に気づき、他からフィードバックを受けることによって修正する機会を得るというプロセスが重要であると

ＦＤ委員会

考えたからです。

前期、後期と１回ずつ全員に発表の機会を与えました。前期は、理論や教授法についてグループでの調査に基づく発表、後期は個人で新教材の導入部分について英語での模擬授業（micro-teaching）です。受講者数が多いので、２人でのＴ・Ｔ（１人はALT役）も取り入れ、授業時間内に全員が経験できるよう調整しました。発表後は聞き手から意見や質問を求め、全員がフィードバック・シートに必要事項を記入して提出します。

学生の発表だけでは重要事項が抜けたり、誤った解釈のままになる危険があります。これを避けるため、発表準備段階ではメール等で相談を受け付けました。また、発表後には必ず私が補足やまとめをする時間を設けました。さらに、提出されたフィードバック・シートは毎回目をとおしてコメントを書き、質問には次回の授業の初めに私から口頭で回答するとともにハンドアウトを作成して配付しました。フィードバック・シートは最終課題作成前に、私の評価・フィードバックとともに発表者に渡します。

比較文化基礎講読

（比較文化学科２年次必修科目）

比較文化学科教授　分田順子

まず、この科目のあまり語られることのない狙いですが、私はそれを、担当教員が、まだ研究テーマを模索中の２年生に、各々の研究分野で発掘してきた「お宝」ともいうべき資料を示し、その分野の調査・研究の醍醐味を伝えることにあると理解しています。それが学生たちの知的好奇心に火をつけ、３年次以降の調査研究のイメージを明確にすると思うからです。

毎回の指導は、各クラスのテーマに関する英語文献の読解が中心になるわけですが、その段階に進む前に済ませておくことがあります。昨年の私のクラスのテーマは「紛争／平和構築と女性」でしたが、重視したのは、学生たちがこの初めて分け入るフィールドのイメージを共有することでした。そこで、AV資料を用いて「女性による平和構築の現場」に「赴く」ことにし、あわせて日本語文献により「戦時と平時における女性に対する暴力のつながり」を理解できるようにしました。

次の段階が英語文献の講読ですが、紛争から平和への移行期にある世界14地域を訪れた国連の独立査察官の報告書を読み解くのに必要なキーワードは、予め私が解説しました。学生がテキストの要点を理解した上で、自分の目に留まったことを独自に調べる力量を身につけるという流れを阻害するものは、担当者が取除くというのが私の方針です。

この最終段階における学生独自の資料探索と入手資料をもとにした報告準備の出発点になるのが、ネット上の資料情報サイトPeaceWomen.orgです。学生たちは、そこから英語を読むことさえ厭わなければ、広大な世界に船出してゆけると知ります。学生たちが報告の中で、「コロンビアの革命組織による暴力に脅かされる女性に対し、国連や人権NGOに何ができるか」と問い、「紛争後のルワンダ政府が打ち出したジェンダー政策の実効」を問うのをききながら、半期間の学生の成長ぶりに感慨を覚えたしだいです。

出欠票の活用

非常勤講師　中澤和男

私の担当は、共通教育科目の学校図書館司書教諭資格と図書館司書資格修得のための講座です。授業形式は半期の講義と集中講義です。

講義内容は文部科学省の規程に基づいて記述された教科書に拠りますが、授業進行の円滑化を図るためパワーポイントを用いています。プロジェクターで投影するスライドの内容は教科書の摘要ですが、予め学生に縮刷したプリントとしても配付しています。また、教科書の内容を補足するために、最新のデータや関連の情報記事なども適宜プリントして配付します。さらに司書教諭や司書の現場での実践の姿を紹介する映像資料があれば、授業の進行状況を見ながら視聴の時間を設けています。

大教室での多数の学生に対する講義形式の授業なので、円滑な授業進行を優先すると私の側の一方的な情報提供になりがちで学生との情報交換の場を授業時間内に作りにくい面があります。そこで半期の講義の場合、手製の出欠票に＜意見・質問・感想欄＞を設け、回答を必要とするものについては次週の授業の際に回答するようにしています。毎回様々な書き込みがあります。それにより学生達の授業に関する感想・質問、あるいは図書館、読書、教育実習などについての感想、意見などを知ることができます。多数の受講生の漠然として掴みきれない反応が具体的な手応えとなって実感でき、以後の授業を進めるうえでの有効なヒント提供源となっています。

文大だより

図書館ガイダンス大盛況

－４月から始まりました図書館のガイダンス参加者は、約２ヶ月で昨年度の年間参加人数を超え 763 名です－

４月８日に開催された、新入学生のオリエンテーションでは、大学で学ぶということの中での図書館の存在、図書館の簡単な利用方法、図書館でのガイダンスを受ける意味などを図書館学の先生から全員が説明を受けました。

図書館学の先生のすばらしい説明が功を奏し、『図書館ガイダンス』は「図書館ツアー」・「検索編＝蔵書の検索方法・文献探究」合わせて 612 名もの参加を頂きました。

このガイダンスには、社会学科・英文学科・比較文化学科の各１年生への初年次教育である、学術情報リテラシー教育参加者も含まれています。

参加された学生からは、「ガイダンスに参加して良かった」「図書館の使い方がわかった」「図書館には図書以外の資料がたくさんあるんだ」「ＤＶＤを借りて行こう」「データ・ベースを使いこなしたい」等々の感想を頂いています。また「図書館ツアー」参加者からは終了した時点で次の「検索編ガイダンス」の申込があり、図書館学の先生や図書館側でもうれしい悲鳴でありました。ちなみに連日のガイダンスで図書館学の日向先生は、少しスマートになられました。

「ゼミ・クラス単位図書館ガイダンス」では各学科の先生方の協力を頂きまして 12 ゼミ・クラス 151 名の参加を頂いております。

６月以降からのガイダンスは、もちろん「図書館ツアー」・「検索編＝蔵書の検索方法・文献探究」も引き続き開催していますが、研究・リポート作成、卒業論文の資料収集に役立つ「図書館ガイダンス研究編」を開催します。

どういうキーワードや切り口でレポート・論文を書き始めたら良いのか、文献を収集するのにどのようなツールを使用すれば良いのか悩んでいるのであれば、このガイダンスに参加していただくと、きっとそのヒントが浮かぶかも。参加お待ちしています。

笠原十九司氏に名誉教授の称号を授与

４月 13 日（火）本学名誉教授称号授与式が学長室において行われた。

今回名誉教授の称号が授与されたのは、今年３月末に本学を定年により退職した元比較文化学科教授笠原十九司氏で、西室理事長、福田副学長、比較文化学科大辻学科長を始め各役員が列席するなかで、病気療養中の今谷学長に代わり高田理孝副学長から名誉教授認定証が授与された。

笠原氏は本学を退職した後も東アジア近現代史と歴史認識について研究活動を続けており、現在も本学非常勤講師としても教壇に立つなど活躍中である。

文大だより

第37回鶴鷹祭

－都留文科大学　昨年に引き続き勝利！！－

高崎経済大学とのスポーツ戦「鶴鷹祭」は今年で37回を迎え、6月26日（土）・27日（日）の2日間にわたり高崎経済大学で開かれました。総合成績は、都留文科大学12勝、高崎経済大学10勝で都留文科大学が昨年に引き続き優勝を果たしました。

梅雨空の中でしたが大きな天気の崩れもなく予定通り大会を進めることができました。26日午前10時30分より開始され両大学共に白熱した戦いが繰り広げられました。1日目8対2で都留文科大学が大きくリードをし、迎える2日目4対8と高崎経済大学が追い上げてきましたが都留文科大学が逃げ切り優勝をつかみ取りました。今年は高崎経済大学が主催となり行なわれ、相互の大学の伝統を受け継ぎ、両校の親睦を深めることを目的とし戦いました。体会終了後に行われた交歓会ではお互いに称え合い親睦を深めました。

戦績は次の通り。本学の勝は○負は×、（　）内は男女の順で、弓道（×）、剣道（○○）、硬式テニス（××）、サッカー（×）、柔道（○）、準硬式野球（×）、ソフトテニス（○○）、ソフトボール（×）、卓球（×○）、バスケットボール（○○）、バトミントン（○×）、バレーボール（○○）ハンドボール（×）、ラグビー（×）、陸上競技（○）。

第89回関東インカレ 男女共にリレー入賞！！

5月15、16、22、23日の4日間で開催された第89回関東学生対校陸上競技選手権大会（関東インカレ）において、本学陸上競技部が男女共にリレー種目において入賞を果たしました。

男子4×100mリレーのメンバー1走：石野玲央（初教3年）、2走：青木邦成（初教4年）、3走：堀内貫平（初教2年）、4走：赤木大介（初教3年）のオーダーで3位入賞を果たし、4×400mリレーにおいても同メンバーにおいて4位入賞と男子の活躍が目立ちました。個人種目においても200mで堀内が3位入賞。男子総合6位入賞を果たし力をつけてきました。

女子4×400mリレーにおいてはメンバー1走：鈴木千夏（初教3年）、2走：飯尾絢（初教4年）、3走：笹本絢（初教4年）、4走：北村千聖（初教2年）のオーダーで3位入賞。また4×100mリレーで7位入賞と男女共に全てのリレー種目において入賞を果たしました。男子主将の林陵平（初教4年）は関東インカレを終え「今後も試合が続くので良い流れを繋げていきたい。」と今後への抱負を語った。リレーはチームの力が試されるものであり更なる活躍を期待したいと思います。

文大だより

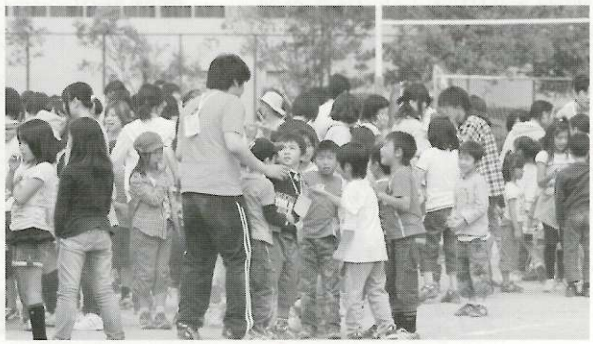
第41回つる子どもまつり開催

５月16日（日）今年で41回目となる「つる子どもまつり」が、市内の幼児から小学生の子どもたちを集め開催された。

地域市民のボランティア団体や本学学生サークルが、子どもたちを対象に神楽実演鑑賞会、影絵遊び、木工品作りなど体験イベントに取組んだ。

午後からは本学グランドをいっぱいに使ったゲームなどが実施され、キャンパス内に元気な子どもたちの声が響いていた。

今回は穏やかな天候にも恵まれスケジュール通りに開催されたが、少子化の影響か年々参加者数は減少傾向にある中にあって、本学の学生が中心となった伝統のあるイベントとして、今後も地域貢献の一貫として長く引き継がれることが期待される。



タイ王国公使参事官が本学を訪問

５月19日（水）タイ王国公使参事官ワリン・スチャラン氏が本学を訪問し、タイ人留学生の受入れなどについて本学の高田副学長をはじめ国際交流室の窪田憲子室長など留学関係者との意見交換が行われた。

ワリン・スチャラン氏によれば、タイでは日本企業とともに日本語人気が高く、日本への留学を志す若者が多いため、本学のように交換留学などで実績がある大学に留学生の受入れを希望している。タイ王国としても将来は日本とタイとの架け橋となる人材育成も視野に入れた留学を推進しているとのことである。

また、タイ国内の国内情勢に触れ、国民が沈静化し治安が安定するまでにはあと数年かかるが留学の実施までには心配無いとのことである。

本学としては留学生の現状を説明したうえで、国際的な学生交流を実現させる条件でもある英語授業の重要性など多くの課題があり早急な対応は困難であるが、アジア諸国の留学生の交流については本学も検討しているため活発な意見交換が行われた。

懇談するワリン・スチャラン氏（右奥）

文大だより

本学卒業生と学生、日本代表陸上選手として2大会出場

第52回東日本実業団女子100m決勝ゴール

11月21日～27日に中国広州で開催される第16回アジア競技大会の陸上競技日本代表として、本学卒業生佐野夢加（平成20年3月初教卒、現在都留文科大学職員）が選ばれた。

優勝表彰台の川崎葵

この代表の座は、6月4日～6日に開催された第94回日本陸上競技選手権大会において女子100mで見事4位に入賞した実績が認められたもので、自身初の日本代表となった。

佐野によれば「職場をはじめ多くの方々にご支援いただき、夢だった日本代表選手になることができました。本当にありがとうございます。現在は、喜びとともに、日の丸を背負って競技する責任感と緊張感でいっぱいです。」とのことで、アジア大会では、4×100mリレーメンバーの一員として参加することが濃厚である。

また、7月19日～25日にカナダ・モンクトンで開催される第13回世界ジュニア陸上競技選手権大会の日本代表として本学初等教育学科1年の川崎葵も選ばれ、大会では女子100mハードルと4×100mリレーへの出場が予定されている。

川崎は6月の日本学生個人選手権の女子100mハードルで本人初となる全国大会優勝を成し遂げ、今回はそれらの実績が認められての代表選出となった。また、今年入学当初から好調を維持しているため本番での活躍が期待される。

東日本実業団　表彰台の佐野夢加

人事異動

平成22年5月1日付の人事異動は次のとおり、氏名の前が異動先、（　）内は前職。

採用　情報センター講師　日向良和
国文学科特任教授　新見公康
地域交流研究センター特任教授　品田笑子
保健センター特任教授　渡辺新
地域交流研究センター特任准教授　北垣憲仁

退職　笠原十九司（比較文化学科教授）
田中孝彦（初等教育学科教授）
相川進（学生課管理主幹兼課長補佐）
亀田香世子（総務課主幹）
尾曲千代子（学生課主幹）
伊藤英里果（総務課副主査）
日向良和（総務課副主査）

転入　学生課副主幹　柴田純子（行政管理課副主幹）/学生課副主幹　外川恵子（福祉課副主幹）/総務課主査　高山竜一（学びのまちづくり課主査）/学生課主査　志村高男（水資源活用課主査）/学生課主任　有賀ひとみ（学びのまちづくり課主任）/総務課主事　藤江毅（税務課主事）

転出　政策形成課主幹兼課長補佐　高部剛（総務課経営企画室副室長）/山梨県東部広域連合事務局次長　重森収（総務課情報センター主幹）/介護老人保健施設つる事務局主幹　佐藤ひとみ（学生課副主幹）/政策形成課主査　田中正樹（学生課主査）/会計課主査　谷内ゆかり（学生課主査）

昇任　初等教育学科教授　坂田有紀子（初等教育学科准教授）/比較文化学科教授　辺英浩（比較文化学科准教授）/初等教育学科准教授　市原学（初等教育学科講師）/総務課経営企画室副室長　志村元康（総務課主幹）/学生課課長補佐　小林泰憲（学生課主幹）/学生課主幹　久保田浩（学生課副主幹）/総務課副主査　関戸章雄（総務課主任）

編集後記

編集後記にかえて

鳥原正敏

平成22年度が始まり4ヶ月が過ぎようとしています。今年の春は全国的に気温が低く、都留でも4月に入ってから雪が降りました。巷では上海万博、宮崎県の口蹄疫問題、子ども手当の混乱、鳩山首相の辞任と菅総理の就任、サッカーワールドカップ南アフリカ大会など、めまぐるしくニュースが飛び交っています。

この様な中、本号は6月23日発行予定で編集を進めてきました。しかし、5月に今谷前学長が退職された為、新学長の就任を待って発行日を改めました。お忙しい中、原稿を頂きました加藤新学長、締め切り変更等に御協力頂きました方々に、心より御礼申し上げます。

「モミジの木」の前で、安宅正路先生（右、名誉教授）と私（左）

今号も「新学長就任」、「法人化特集」、大哺乳類展協賛の報告「第6章むりねむの森へようこそ」など、これまで以上に沢山の、興味深い記事があります。しかし、ここにはありませんが「番外編、私の選ぶ上半期一番のニュース」は、美術棟の耐震補強工事が終わり、実際に教室が使えるようになったことです。昨年夏から始まった工事は、多くの方に御協力頂きながら、この3月に無事終了しました。以前に比べ、美術棟の周りは夜でも明るくなり、配管の水漏れもなく、入り口の階段には両側に手すりがつきました。この様に美術棟が清潔で安全になったことを、とてもうれしく思います。おそらく卒業生の皆さんが、この快適になった様子を見たら驚くことでしょう。工事中に御尽力、ご協力賜りました関係者の皆様に、美術教室一同、厚く御礼申し上げます。

ところで美術棟といえば、正面の階段を上がった左側、工芸室の前に、直径30センチほどの「モミジの木」があります。新緑や紅葉など四季折々、季節の移ろいを感じさせてくれます。おそらく美術棟を建てた頃、大学の先人が植えられたのでしょう。ずっと先のことを考えて、このモミジの苗を植えられた方の想いとセンスに、私は感謝と尊敬の念を抱かずにいられません。また、なにかと移ろいやすいこのご時勢、私も先人のごとくありたいと思う今日この頃です。

さてこのモミジの由来、勤続33年目の安宅先生（名誉教授）にお聞きしてもわかりませんでした。どなたか、この「モミジの木」についてご存じの方がおられないでしょうか、御一報頂ければ幸いです。

本　ぶんだい堂

江戸の俳壇革命
芭蕉から蕪村登場

楠元六男／著
2010年出版
角川叢書　2,700円＋税

◇くすもとむつお　国文学科教授

〈解釈〉と〈分析〉の統合をめざす文学教育
新しい解釈学理論を手がかりに

鶴田清司／著
2010年
都留文科大学出版助成による出版
学文社　18,000円＋税

◇つるたせいじ　初等教育学科教授

朝鮮儒教の特質と現代韓国
李退渓・李栗谷から朴正熙まで

邊　英浩／著
2010年
都留文科大学出版助成による出版
クレイン　4,700円＋税

◇ぴょんよんほ　比較文化学科教授

富士山学への招待
NPOが富士山と地球を救う

渡辺豊博／著
2010年
都留文科大学出版助成による出版
春風社　1,500円＋税

◇わたなべとよひろ　社会学科教授

都留文科大学広報委員会　菊池信輝（委員長）・鳥原正敏（副委員長）・髙橋宏幸・中地　幸・重冨惠子・日向良和（附属図書館）
福田誠治（担当副学長）・志村元康（経営企画室）・関戸章雄（情報センター）・深澤祥邦（総務企画担当）